



WALDORF
100

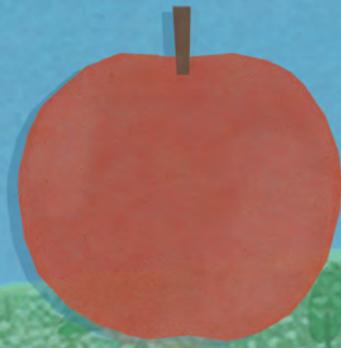
LEARN
TO CHANGE
THE WORLD

 横浜シュタイナー学園

サステイナブルスクール報告書

2016年9月 ~ 2019年1月

こんなにいっぱい！！
日常に生かし 育てる ESD



 NPO法人
横浜シュタイナー学園

横浜シュタイナー学園はユネスコスクール加盟校です



〒226-0016 横浜市緑区霧が丘 3-1-20
<https://yokohama-steiner.jp>
Tel/Fax:045-922-3107

ESD

Education for Sustainable Development

横浜シュタイナー学園
サステイナブルスクール報告書

2016年9月～2019年1月

こんなにいっぱい
日常に生かし 育む ESD

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
世界を変えるための17の目標



存在をはぐくむ学び

サステイナブルスクール事業推進委員会委員長
ユネスコ/日本 ESD 賞国際審査委員
聖心女子大学・教授
永田 佳之

四半世紀ほど前に遡りますが、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が設置した「21 世紀国際教育委員会」は学びを 4 つのタイプに分けて示しました。つまり、「知ることを学ぶ」(learning to know)、「なすことを学ぶ」(learning to do)、「共に生きることを学ぶ」(learning to live together)、「人間として生きることを学ぶ」(learning to be) から成る「学習の 4 本柱」です。同委員会は、人が生きていく上でそれぞれが同等に重要であることを説いています。

ところが近年、ユネスコは、グローバル化が急速に進展する現代社会においては「共に生きることを学ぶ」と「人間として生きることを学ぶ」の重要性が増している、と主張するようになりました。確かに、「グローバル人材の育成」が連呼され、グローバル化の荒波を乗り越えるための問題解決力などのスキル習得が何処でももてはやされている世界の教育シーンを鳥瞰すれば、こうした主張に首肯する人は少なくないのではないのでしょうか。

では、これらの教育、つまり 21 世紀に重要性を増していると言われる「共に生きることを学ぶ」と「人間として生きることを学ぶ」は実際、どのような学びなのでしょう。

前者については、一般的に「共生のための教育」と呼ばれており、同じクラスの仲間どうしが協力し合う学びから国や文化を異にする生徒たちが一緒に問題解決に取り組む学びに至るまで様々です。

一方、後者については、つとに重要性が標榜されながらも、その実際は共有されていないと言えましょう。その訳語も、邦訳版には「人間として生きることを学ぶ」と訳出されていますが、「人間になるための教育」や「人間存在を深めるための教育」など、様々な解釈を許容してきました。

さて、この冊子は、そんな 21 世紀に求められる教育のあり方を手に取るよ

うに分かりやすく伝えてくれます。それは、ひとことで言うなら、人間存在の基盤をつちかう教育です。格差や気候変動、難民問題などが次々と台頭する現代社会は「不確実性の時代」と呼ばれ、これからの世代にとって日常は不安に駆り立てられる場面の連続です。しかし、横浜シュタイナー学園の教育は、世の中にはたとえ悲観的な現実があろうとも、心の奥底に、人生は生きるに値するという全幅の信頼感をもてるように育む教育だと言えます。予測がなかなかつかない時代だからこそ、闇雲にリスクに対処するための知識や技能を身につける教育よりも、子どもの存在そのものを育むような教育が重要です。このことを論ずるよう、サステイナブルな未来へとつながる揺るぎない意志としなやかな感性を備えた若者が育まれていく日常がこの冊子には描かれています。

私ごとで恐縮ですが、2005 年からスタートした「国連 ESD（持続可能な開発のための教育）の 10 年」、さらにその後の「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（2015-2019 年）」の間、持続可能な未来を目指して世界中で展開されてきた教育実践をユネスコ本部の専門委員*として評価する立場にありました。この間の経験から言えることは、世界中の優良実践でさえも深い次元で「存在をはぐくむ学び」を実現できている学校は希だということです。

持続可能な未来を創るために世界のあり方を再構築するのが ESD であり、その優良実践からは未来の教育の姿が透けて見えると言われます。ユネスコスクールならびに ESD 重点校と呼ばれるに相応しい横浜シュタイナー学園の実践は教育の未来形を先取りしている — この冊子を読み進めていくと、そんな想いを抱くのと同時に、やはり世の中は捨てたものではないと思えてくるのです。

*モニタリング評価専門家会合委員（2009-2014 年）及びユネスコ/日本 ESD 賞国際選考委員会委員（2015-2019 年）

はじめに

横浜シュタイナー学園
ユネスコスクール担当教員
横山義宏

サステイナブルスクールの研修会に参加し、先生方と交流する度に、サステイナブルスクールの一員として何を発言していけばよいのか常に考えさせられてきました。そして回を重ねていくうちに、何かを発信したいと思うようになりました。その思いを形にすることにも時間がかかりました。そして浮かび上がってきたのが次のような考えでした。

横浜シュタイナー学園での学びとESDの結びつきを、わかりやすいかたちで伝えること。さまざまな分野で教育に従事する方々の実践でいかしていただくことはできないだろうか。そのようなことから、この冊子作りは始まりました。

自分を取り囲んでいるものに畏敬の念をもって生きていけるようになることは、横浜シュタイナー学園のひとつの目標です。体を動かし、驚き、喜び、感動をもって学んでいくこと、自分のまわりの大人を尊敬し、自然環境に感謝の気持ちを感じていけるように心を育んでいきます。ESD活動につながるそういった教育活動を紹介することが、この学校のできることではないかと考えました。

第一部で取り上げられた内容はわたしの授業実践をもとに書かれていますが、これは一つの事例で、横浜シュタイナー学園で子どもを導いている他の先生方も、ご自身で創意工夫されて授業を実践しています。紙面や時間の都合で、取材の範囲をしばっていったことを申し添えます。

最期にこの冊子を読まれた方が、ここから何かをくみ取っていただけたら幸いです。思いを形にするために冊子作製に尽力して下さった方々、そしてこの冊子を生み出すに至ったサステイナブルスクールの研修会を催し運営して下さった皆様に感謝申し上げます。

目次

存在をはぐくむ学び	2
はじめに	4
目次	5
用語解説	6
第一部 ESDの土台をつくる低学年から中学年の学園生活	7
リンゴのなかに隠れていたもの	8
自信が育むアクティブラーニング	12
お話がつむぐ一日	14
発表会を待つ時間に	18
おそうじの時間、家づくりの時間	20
3年生の家づくりの時間から	25
うたとイメージの体育室	26
畑づくりの授業とESDとの関連性	30
第二部 高学年の高度な学びの展開	33
第三部 卒業生の姿	49
勉強が面白い＝卒業生を訪ねる（上）	50
ルート・ファインディング＝卒業生を訪ねる（下）	56
第四部 資料編	61
ESDに想うー出会いと学び	70
おわりに	71

用語解説

*ユネスコスクール

国連の教育科学文化機関（UNESCO）が認定した、教育を通してユネスコの理想を実現している教育機関の国際ネットワークです。ユネスコスクールは日本国内での通称で、正式な名称は UNESCO ASPnet(UNESCO Associated Schools Network) です。

2018年10月現在1,116校のユネスコスクールが日本にあり、横浜シュタイナー学園もそのひとつです。全国でも珍しいNPOが運営するユネスコスクールとして、2011年1月にユネスコ・パリ本部より認定を受けました。

* ESD(Education for Sustainable Development)

地球の持続可能性が世界共通の課題となり、これまでの社会発展の価値観を教育によって変容させることを目指して提案されたのが、ESD＝持続可能な開発のための教育です。ESDの推進を2005年に国連が採択し、ユネスコが中心となって推進しています。ESDでは、気候変動や環境問題のような課題を中心に、地球と社会の問題をトータルで解決していく柔軟で総合的な学びが求められています。そのESDのもっとも重要な担い手がユネスコスクールなのです。

*サステイナブルスクール

日本中に広がったユネスコスクールの質をさらに高めていくために、文部科学省は全国から良質なESDの実践校を公募し、3年間のESD重点校形成事業を進めてきました。採択された24校はサステイナブルスクールと呼ばれています。本冊子は、サステイナブルスクールである横浜シュタイナー学園が、3年間の活動の報告書としてまとめたものです。

* SDGs(Sustainable Development Goals)

SDGsは「エスディーゼーズ」と読み、国連によって採択された2030年までに達成すべき持続可能な開発目標のことです。1. 貧困、2. 飢餓、3. 健康と福祉、4. 質の高い教育、5. ジェンダー平等、6. 安全な水と衛生環境、7. エネルギー、8. 人間的な労働と雇用、9. 時代に即した技術刷新、10. 格差の是正、11. 持続可能な街づくり、12. 適切な生産と消費、13. 気候変動、14. 海洋保全、15. 大地保全、16. 平和と公正、17. 互いに手をつなぐこと、これら17の目標に全世界が取り組んでいるのです。

SDGsの取り組みではとくに教育の役割が大きいとされ、2018年度よりサステイナブルスクールが「ESDの深化による地域のSDGs推進事業」に位置づけられています。

*ホールスクールアプローチ（機関包括型アプローチ）

特定の授業のなかだけでESDに取り組むのではなく、カリキュラム、学校組織、地域なども含めたコミュニティ全体でESDを実現し、コミュニティ全体を変容させていく取り組みのことです。

第一部

ESDの土台をつくる 低学年から中学年の学園生活

取材と文 佐藤雅史

監修 横山義宏 / 福田憲明

イラスト 太田初

この冊子の第一部には、横浜シュタイナー学園の日常を描写した6編のストーリーが収められています。これらはユネスコスクール担当教員の横山義宏に取材し、実際にあった出来事をわかりやすく再編したものです（登場する子どもたちの名前は仮名です）。

お読みになると、皆さんが子どもたちや先生と教室や校庭での活動をともにし、その場を見守っているように感じられるかもしれません。日本におけるESD研究の第一人者である聖心女子大学教授の永田佳之さんは、その論考「持続可能な教育実践とは－ホールスクール・アプローチを超えて－」*で、このような日常の活動の隅々に血液のように行き渡るESDを「暗示型ESD」と呼び、ホールスクール・アプローチのさらに先にあるモデルとして紹介してくださっています。

このような暗示型ESDは、言葉の通り目に見えにくい実践です。そこで今回は、その実践を臨場感あるストーリーとして描くことで、そのESDエッセンスがわかりやすく理解できる資料づくりを目指しました。この試みによって、教育現場に携わる多くの先生方が「これならできる」「やってみよう」と思っただされれば幸せに思います。

*『持続可能な教育社会をつくる』（せせらぎ出版、2006年）所収、本誌P.69参照

リンゴのなかに隠れていたもの

―法則と出会う驚きから学び、法則の美しさを味わう授業― 1年生の数の学びを例に

法則はいろいろなもののなかにみつけることができ、それらの法則はしばしば美しさをともなって現れるものです。そのような法則との出会いは、子どもたちを深い学びへと導くための最良の道しるべとなります。低学年の子どもたちは、どのように法則と出会い、その美しさに感嘆するのでしょうか。横浜シュタイナー学園の数の学びを例に見てみましょう。

横山先生のクラスでは、今、数字を学んでいます。「1」から始めて、先日までに「4」の数字まで学び終わりました。

初夏のさわやかな朝です。南東向きの教室の窓に下げられた真っ白なカーテンに、木漏れ日がゆれています。子どもたちが教室に入ってきました。ひとりの男の子が足を止めました。いいものを見つけたのです。黒板の右手の教室の入り口脇にある“季節のテーブル”^{*1}の上にそれは置かれていました。それはつやつやと光る赤いリンゴでした。

その男の子が「リンゴだあ」と声を上げると、次々にテーブルの周りに子どもたちが集まってきました。素晴らしい発見に、どの子も目が輝いています。「ぴかぴかしてる」「これ食べるの?」、口々に言い合っています。美しいリンゴがなぜここに置かれているのか、このリンゴから何が始まるのか、子どもたちの心にわくわく感が広がります。

やがていつものように授業が始まり、ひとしきりからだを動かした後、呼吸を整えるために少し間を置いて、先生が話し出しました。「今日はいつもとは違うものが教室にあるね」と先生。「リンゴ!」と、あちこちから声が上がります。先生はリンゴを取り上げて示しながら、「この前は4を学んだね。今日はこのリンゴを使って5を学ぶよ」と先生が言うと、「リンゴだからゴ?」という声。

先生は隅の机の方に歩いて行きながら、「その学びのためにはこれが必要なんだ」と言って、机の上にかかっていたシルクの布を持ち上げました。布の下から現れたのは、まな板と包丁でした。先生はまな板と包丁を子どもたちの目の前に運び、その上にリンゴを置きました。普段から家庭でリンゴを切る光景を目にしている子どもたちは、その光景を目に浮かべながら、先生の手動きを食い入るように見つめます。「切るよ」先生はそう言ってリンゴに包丁の刃

*1 季節のテーブル：季節感を伝える様々な飾りつけをほどこした小テーブルで、教室のコーナーに置かれています。低学年の子どもたちはこのコーナーをとっても大事にしています。

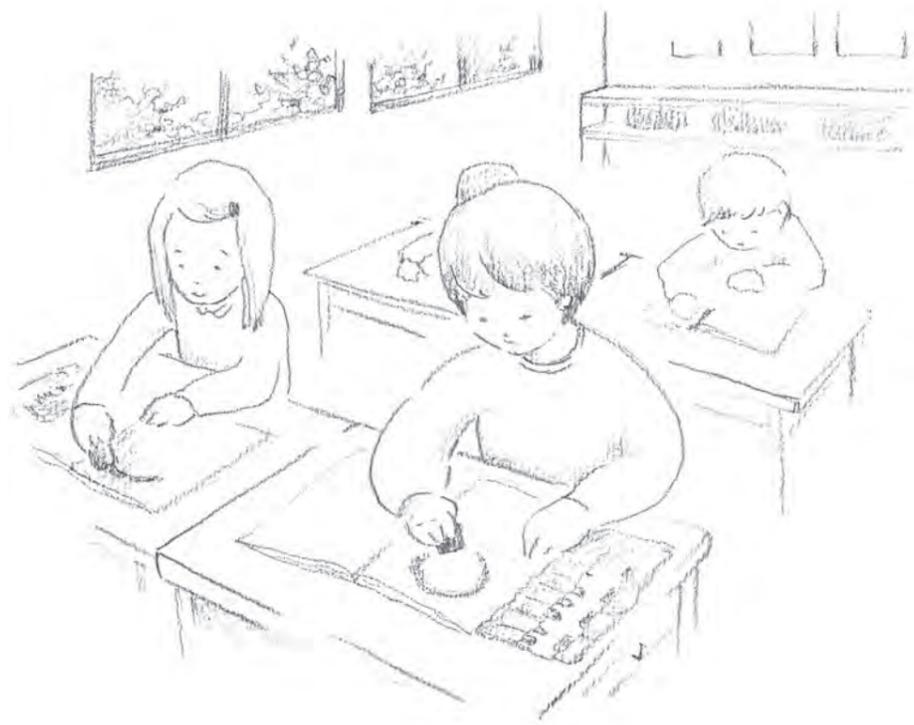
を当てましたが、何を思ったのかその手を止めました。子どもたちは固唾をのんで見守っています。

子どもたちが集中しているのを確認してから、先生は「今日はお家でやるようには切らないで、こうして切るよ」と言って、リンゴを横に向け直しました。リンゴは輪切りになる向きになりました。先生はおもむろに包丁を入れてリンゴを二つに切り分け、断面が見えないよう両手で押さえながら子どもたちの前に差し出しました。全員の視線がリンゴに注がれています。その空気をしっかり意識しながら、先生はふっと息を吐き、手品師のようにふたつの断面を子どもたちの方に向けました。子どもたちの視線が、リンゴの中央に星形に並ぶ種のさやを無言で数えていきます。「5だ!」「5が出た!」、驚きと喜びが入り交じった声が教室に広がっていきます。

ざわめきが収まるのを待って、先生は言いました。「5が見つかったね。今日はね、まだリンゴをもってきているんだ。見つけられるかな? 探してごらん」。宝探しが始まりました。「あった!」「見つけた!」、ふたつの声が上がって、カーテンの陰から2個のリンゴがみつかりました。

リンゴを受け取った先生は、「さっきのリンゴには5が隠れていたね。でも、





このリングはもしかしたら違うかもしれない。どうだろう？」と言いました。子どもたちから上がるいくつかの意見を聞きながら、先生はふたたびリングをふたつに分けました。

「あっ、やっぱり5だ！」子どもたちは、大発見をしたように嬉しそうです。「でもね、このリングもたまたま5だったのかもしれないよ」と、先生は問いながら、次のリングを取り上げます。次のリングからも、やっぱり5つの頂点をもつ星形が現れました。

先生は黒板に輪切りのリングの断面を描き、子どもたちにもノートに描くように指示しました。子どもたちは、さきほどのわくわく感を何度も反芻しながら、クレヨンでいねいに色を塗っていきました。

先生は授業の最後にこう言いました。「みんなのお家にもリングがあるかもしれないね。もしもあったら、今日学んだことをお母さんやお父さんに教えてあげましょう」。

その日の夕べ、かなりの家庭で、輪切りのリングが食卓に並ぶことになりました。じつは、直前の保護者会でこの授業のことが父母に伝えられていたのです。「お家でもリングを用意して、子どもたちの言うとおりに切ってあげてください」と言われたお母さんお父さんが、この日ばかりは面倒がらずに子どもたちに言われたとおりにリングを切り、童心に戻って子どもたちとリングの芯を観察したことは言うまでもありません。そんなお母さんお父さんの姿を、子どもたちは誇らしい気持ちで受け止めたのでした。

●この事例ではこんなことに焦点を当てて紹介しました

- *先生が問いを発してから結果を確認するまでの間のつくり方、同じモチーフの繰り返し、自宅に持ち帰ってからも追体験する機会を用意するなど、子どもたちのセンス・オブ・ワンダーをくすぐる要素がたくさん見つかると思います。
- *授業の後半、体験した内容をていねいに絵に描く場面があります。体験が子どもたちの内面でさらに鮮やかに印象づけられ、学びが深まる重要な活動です。
- *結びの場面に出てくるような家庭の協力によって、子どもたちは自分の学びを大切に思う気持ちをさらに深くします。

●ESD やSDGs との関わりでは…

- *自然界のすべての事物に目には見えない法則がかくされているという体験は、物事を深く掘り下げて理解しようとする態度を育み、高学年以降の課題解決能力の基盤となります。
- *先生が、発見の驚きや喜び、世界のなかに美しさを見いだすことへと自分たちをいざなってくれるという信頼感が、クラス全体の雰囲気をも前向きで真摯なものにし、それがESDの揺るぎない土台になります。

自信が育むアクティブラーニング

—適切な問いかけは自己肯定感の扉を開く— 1年生の算数の授業より

横浜シュタイナー学園の1年生の授業から、一般に考えられているアクティブラーニングとは異なる「アクティブな」学びの可能性を見たいと思います。低学年から中学年の子どもにおける能動性の本質がどのようなものであるのかを探ってみましょう。



朝の主要教科の時間です。机は教室の周囲に片付けられて、椅子を教室の中心に向けて丸く並べた空間で、先生と子どもたちが輪になっています。いまちょうど、歌と身振りで季節の風物を体験するライゲン*1が終わりました。からだを心でたっぷり動かして、しっかりと目覚めた子どもたちは、椅子を動かして先生に向き合うように扇形に並べ直します。毎日のことなので、子どもたちの行動は流れるように途切れなく進んでいきます。きれいな扇形ができると、子どもたちはめいめい自分の椅子に腰掛けまし

た。これからいよいよ数の学びが始まるのです。子どもたちのきらきらした目が先生の次の行動に注がれます。

先生は、ゆったりした足取りで教室の窓際の教卓に近づき、その上からトーンブロックという楽器を取り上げました。木琴が一本だけになったような打楽器です。先生は子どもたちの前に腰を下ろすと、ポン、と楽器を一回鳴らしました。暖かみのある乾いた音が教室に響きます。

「みんな、よく聞いていた？ いまいくつ音が聞こえた？」と先生。「ひとつ」「いち！」と子どもたちの声が返ってきます。「そうだね、1だった。じゃあ、また鳴らすよ。いくつ聞こえるかな」。そう言って、先生はすっと息を吸い込みながら子どもたちが聴く姿勢になるのを待ち、ポン、ポン、と2回鳴らしました。先生の呼吸にあわせ、息を飲んで集中していた子どもたちの呼吸がほどけ、一斉に「2！」の声があがります。先生は、3、4、5と鳴らす数を増やしなが、子どもたちが答える姿に目を配っています。

全員で答えていても、数が増えてくると答えるのが遅れる子、わからないと

*1 ライゲン：輪をつくり、授業のテーマ等を物語風に演じて、リズムカルにからだを動かす活動です。低学年ではエポック授業（朝の100分間のメイン授業）の始まりに行われます。ライゲンで心身を目覚めさせてから授業内容に導くことで、学びの質が高められます。

いう表情をする子がいます。一人ひとりの様子をつかめたところで、今度は音が鳴った数だけ手を叩くことにしました。ポン、ポン。パン、パン。「いいね。今度は全員でやった後に、だれかに当てるよ」。ふたたび小さな数から全員で始めた後、先生はユウカと目をあわせて名前を呼びました。ポン、ポン。ちょっとはかみながらユウカは「2」と答えました。先ほど、ユウカは8くらいから答えが遅れ気味になっていたのですが、2なら自信をもって答えられます。全体、ひとり、全体、ひとり、と繰り返しながら数が増えていきます。

こうして全員が自分ひとりで答えられました。自信をもって答えられたことで、もっとやってみようという気持ちが子どもたちの内に高まり、子どもたちと先生との結びつきは深くなっていきます。次は、楽器が鳴った回数だけジャンプします。少しだけ難易度が上がりました。今度は、勢い余ってケントが1回多くジャンプしました。楽しい笑いが広がります。ケントも一緒に笑っています。皆が十分に自信をつけ、自分を肯定できているので失敗がユーモアになるのです。

リズムカルなジャンプはみんなの心も弾ませます。リズムと喜びの感情を通して、数の体験がじんわりと子どもたちのからだに染み込んでいきます。ジャンプの音は階下の事務室にも響いてきました。事務員さんがちらりと天井を見上げて、「やってる、やってる」という顔をしました。こうして横浜シュタイナー学園の一日は始まるのです。

●この事例ではこんなことに焦点を当てて紹介しました

*横浜シュタイナー学園の低学年の授業は輪になって始まります。輪をつくることで、先生は子どもたちの姿をしっかりと観察することができますし、子どもたちもクラスの一体感を感じることができます。ノートに向かう作業では机を並べて座学のスタイルになります。

*先生が一人ひとりを指名して課題を出すことで、子どもたちは先生がその子の存在を認めているんだという印象を受け取ります。その際、子どもたちへの問いかけの難易度がその子が応答できる範囲であるように配慮すると、「これでいいんだ」「もっとやりたい」という気持ちを助けます。

この雰囲気クラス全体に十分に行き届いていると、クラスが失敗をユーモアで受け止められるようになります。他の子の失敗をあげつらう子どもがいたときは、その子に難易度の高い課題を出して挑戦させます。その結果はもちろん、ユーモアで受け止めます。

●ESD やSDGs との関わりでは…

*低・中学年では、子どもたちがディスカッションするようなアクティブラーニングよりも、この事例のような体験のほうが子どもたちの内発性をより引き出します。その積み重ねを十分に重ねることが、高学年以降の本格的なアクティブラーニングを支える力となります。

お話がつむぐ一日

—すべての基礎をつくるお話の大切さ— お話に満たされた横浜シュタイナー学園の一日

子どもたちはお話を聞くのが大好きですね。お話を聞くことは受動的な経験と思われがちですが、イメージ豊かなお話を聞いているとき、子どもたちの内面はたいへん活発に活動しています。お話は子どもたちを能動的にする、最良のアクティブラーニングになり得るのです。横浜シュタイナー学園のある一日を追い、お話がどのように扱われているのかを見てみましょう。

朝のお話

朝の授業のはじまりの時間。円形に並べた椅子に子どもたちが座っています。子どもたちの目は先生に向けられています。

先生は子どもたちを見渡しながら言いました。「今日は気持ちのいい朝だね。こんな朝には、たくさんきれいなものと会うよね。みんなは学校に来るまでに何を見た？」「朝顔が咲いてた！」「ひまわり！」と子どもたち。

「朝顔」「ひまわり」。先生は子どもたちの答えをひとつひとつ引き取ってから、こう話しました。「どちらもきれいな夏の花だね。その朝顔やひまわりの花はどっちを見ていた？ そう。花はお日さまを見ていたね。夏の花たちはお日さまが大好きなんだよ。みんながお日さまを好きなように、花たちはお日さまに挨拶しているんだね」。

そう言うと先生は子どもたちに注いでいた視線を少し引き上げ、遠くを見るような表情になりました。子どもたちの視線も目の前の空間をじっと見ています。子どもたちは、透明な心のスクリーンにそれぞれ見た花々を映し出し、その花の仕草のなかに明るい太陽を見上げる自分自身の情感を重ねているのです。自分自身の内にあるものが自然の中にもあるという印象は、子どもたちと自然を近づけ、自然の背後に見えない法則を探るという将来の学びへの扉を開いていきます。

じつは、先生もまた、そんな思いを抱きながら今朝の学校への道程を歩んできたのでした。先生は日々、四季とともに移りゆく景色から子どもたちにふさわしいイメージを見つけられるよう、心を向けているのです。

授業もお話で

さて、今日は文字の最初の学びが始まる日でした。その学びは、先生が語るこんな物語から始まりました。

「むかし、中国にひとりの賢者がいました。その人は神さまと話ができました。夜になると賢者は火を起こしました。火から煙が立ちのぼっていくと、その煙のなかから神さまの声が聞こえてくるのです」。

子どもたちの目は先生を見ていますが、ほんとうは、中国の賢者が起こした火から立ち上る煙をありありと想い描き、それを見つめているのです。

「立ちのぼる煙を賢者が見つめていると、そこから神さまの声が語りかけてきました。一賢者よ、わたしはこの世界のあらゆるものをつくり、名前を与えた。今度はおまえが、その名前を表す文字をつくりなさい」。

授業準備のとき、先生は自分で創作したその物語の場面を何度か具体的に想い描いてみました。賢者が庵を出て祭壇の前でたきぎに火をつける様子、やがて炎があがり煙が立ちのぼる様子、中国風の衣装を着けた賢者の立ち姿。いま、先生はその映像を再び想い描き、その生きた絵を自分と子どもたちの間に置いて、その絵を見つめながら物語を紡ぎ出しているのです。語られる物語のなかにそのディテールは描かれませんが、子どもたちは“実際にそれを見て語っている”先生の姿と語りの調子から、自分たちもその場に立ち会っているかのように体験しています。

「やがて祭壇の背後の空が白んで、夜が明けてきました。お日さまが昇ると、賢者はお日さまを仰いで言いました。—ああ、わたしはこのお日さまを表す文字をつくらう—」。

子どもたちの心は中国の賢者の心とひとつになって、胸をときめかせながら、空に昇る太陽を見上げているのでした。

授業の終わりに

お話で始まり、お話で学んだ授業。仕上げはノートづくりです。ノート作業の時間には、机と椅子が座学のスタイルに並べ替えられて、教室らしい光景になります。子どもたちのノートには、昇る太陽の絵とそのかたちを模した「☉」のかたち、それを書きやすく崩した「日」の文字が、クレヨンを使って色彩豊かに描き上げられました。子どもたちは、お話から受け取ったイメージと対話し、そのイメージを反芻しながらノートに描きあげる作業に取り組んで、心と手を存分に動かしました。

このような体験によって、「日」という文字と子どもたちの間にとっても親密で特別な関係が結ばれたのです。（その後、子どもたちは、校庭の土の上に「日」という字をいくつもいくつも書き連ねたり、お家でもお母さんに書いて見せたりしました。）

子どもたちの心は、新しい学びの印象と満足感でいっぱいになりました。「みんな、ノートをしまっていていいよ」という先生の言葉に、子どもたちの心もゆるみ始めます。そこで先生は子どもたちの前に置かれた椅子に座り、一人ひとりの子どもたちがリラックスした姿勢になるのを見守りました。先生は、覚えてきた物語を静かに語り始めました。

「むかし、あるところに、貧乏でしたがとても気立てのよい女の子がおりました。その子はおかあさんとふたりで住んでいましたが、あるとき、とうとう食べるものが何もなくなってしまいました」。

先生が語り始めたのは、有名なグリム童話の「おいしいおかゆ」でした。先生は子どもたちの様子を見守りながら、静かに語っていきます。子どもたちは、この時間は机に肘をついて聞いてもいいし、机に突っ伏して耳だけで聞いていてもよいことになっています。お話のイメージはリラックスしている方がよく伝わるからです。だいたい子どもたちは緩んだ姿勢のまま、目は先生に向けています。先生は、声を張り上げたり、感情移入したりせず、淡々とした調子で語っていきます。その方が、子どもたち自身の自由なイメージの妨げにならないからです。

「そのうち、台所がおかゆでいっぱいになり、家中がおかゆでいっぱいになり、それから家の前の道もおかゆでいっぱいになりましたが、お鍋ははまだ、ぐつぐつぐつ煮ています」。

面白い場面があると、くすり。あちらこちらで小さな笑いが起こります。子どもたちにとっても、先生にとっても、至福の時間が過ぎていきます。

お帰りの時間に

一日の終わり、今日はお迎えの時間までまだ少し時間があります。明日のために椅子も机も教室の周囲に片づけられて、教室は広々としています。先生は、「みんな、ごろんとしてみようか。寝ころがっていいよ」*1と言いました。木でフローリングされた床は肌触りがよく、子どもたちは大好きです。めいめいが、好きな場所を選んでごろんと横になったり、立て膝をついて座ったりしました。先生は、今度は本を取り出して、静かに読み始めました。それはお弁当の後などに先生が読んでくれている『やかまし村の子どもたち』でした。

お話からお話へ、お話で充たされた一日の終わりでも、子どもたちは飽きる

*1 床に寝転がっていいよ：学校での生活にはめりはりは必要ですが、既存の授業スタイルや倫理観にしばられず、子どもの本質からその場にふさわしいスタイルを見つけ出すことを大切にしています。次ページの「発表会を待つ時間」も参考にしてください。



ことなくお話を聞き続けます。言葉から次々にイメージが紡がれ、子どもたちはそのイメージと対話します。こうしていつしか子どもたちはイメージづくりの達人になっていきます。そのイメージを自在に形づくる能力が、文学や語学ばかりでなく、数学、幾何、物理学、化学、社会、音楽、そしてしっかりとした倫理感覚に栄養を送る、太い、太い、根となっていくのです。

●この事例ではこんなことに焦点を当てて紹介しました

*この事例で、お話が良質なアクティブラーニングであることをご理解いただけたと思います。そのためには、先生が「伝わる言葉」を身につけることが大切です。話す際に、話す内容をありありと思い浮かべ、そのイメージを見ながら語るようにしてみましょう。これは、低学年ばかりでなく、高学年の授業でも大切にすべき教授法の基本です。

*お話で育った子どもたちには、「聞く力」が育まれています。それは人の話を深く聞き取ることを可能とする能動的な力であり、その能力を土台として自ら考え行為する力が発展していきます。良質な学びは、この「聞く力」がクラス全体に行き渡っているところから生まれます。お話はクラスづくりにもつながるのです。

*お話でたくわえられた語彙は、培われたイメージを想起する力と相まって、後のコミュニケーション能力や社会性へと確実につながっていきます。

●ESD や SDGs との関わりでは…

*複雑化した現代社会のなかで持続可能な世界を実現するためには、地球規模の出来事と日々の生活を力強く結びつける想像力が必要です。SDGs や ESD との関連が一見見えにくい「お話」ですが、じつは SDGs を実現するための最も本質的な取り組みであることに注意を向けたいと思います。

発表会を待つ時間に

—子どもたちの本質にあった待ち時間の過ごし方— 発表会での待ち時間の過ごし方を例に

日々の活動のなかには、子どもたちが「待つ」という状況が必ず起こります。待ち時間には小競り合いやいざこざが起きたりすることもあります。子どもたちがストレスなく待ち時間を過ごせることができれば、活動の質も高まることでしょう。横浜シュタイナー学園の学習発表会を例に、子どもの本質に合った待ち時間の過ごし方を見てみましょう。

今日は学期末恒例の月例祭*1の日。公共の大きなホールを借りて、学園の全クラスが日常の学びの様子を舞台上で発表し、親御さんも参観して各クラスの成長ぶりを喜びあう祝祭です。今回は3月に開かれる修了の会でもあり、学年修了直前の特別な発表の日となっています。

横浜ラポールシアターは、2年生担任の横山先生にとって初めての会場でした。先生は、クラスのリハーサルの時間よりも早めに会場に入りました。リハーサルと本番の間の長い待ち時間を、どのように子どもたちに過ごさせるかを考えるためです。横山先生は、ホールの施設を一回りした後、外に出ました。施設の手前にはちょうど鶴見川の青々とした土手があり、川に沿って散歩道が通じています。子どもたちと過ごすのうってつけの場所が見つかりました。

しばらく経って、子どもたちが集合し、15分ほどのリハーサルが終わりました。内容はいつも教室でやっているライゲンですが、発表となれば、やはり子どもたちは緊張で気持ちが張り詰めてしまいます。先生はさっそく子どもたちをホールの外に連れ出しました。

外は春のあたたかな日差しですが、風にはまだ冬の冷たさが残り、ほてった子どもたちのからだを心地よく冷やしてくれます。子どもたちはその新鮮な空気を胸いっぱい吸い込みながら、高まった緊張を吐き出しました。やがて川土手の草地に着くと、子どもたちを集めて「さあ、先生が集まれと言うまで、ここで鬼ごっこをしましょう」と先生が言いました。間もなく草地は、土手を上がったたり下ったり、縦横無尽に駆け回る子どもたちの賑やかな声でいっぱいになりました。先生は子どもたちが満足したのを見届けてから、声をかけました。集まってきた子どもたちは来たときと同じように自然に2列の列になり、あっという間に帰り支度が整いました。

ところが、ホールに戻ってみると、月例祭が始まるまでまだ時間があること

*1 月例祭：創立当時のシュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校）では普段の学びの様子を地域に公開する場が毎月設けられていたことから「月例祭」という名前が今でも使われています。

がわかりました。先生は、子どもたちをトイレに行かせ、戻ってきた子どもたちに水筒の水を飲ませました。そして、すぐに席にはつかせずに、先ほど下見しておいたホール2階のロビーへと子どもたちを導きました。そこは人の通行もなく、階段の手すりに囲まれたコーナーが広場のような手頃な空間をつくっていました。床は毛足の短い絨毯のようになっていて、清潔そうです。

「みんな、ここに寝転がっていいよ」。おもむろに先生が言うと、子どもたちは躊躇なく、思い思いの格好で床に寝そべりました。子どもたちはなんだか嬉しそうです。先生は子どもたちの様子を見届けてからその輪の中に腰を下ろすと、1冊の本を取り出して広げました。いま教室で読み聞かせしている『大力ワーニャ』の物語です。子どもたちは寝そべったまま、肘をついて先生を見上げる姿勢のままお話を聞き入る子、横向きに寝転んだまま耳をそばだてている子、なかには気持ちよく寝入ってしまう子もいます。その風景は、草原に寝そべる羊たちと羊の番をする羊飼いの姿そのままです。

やがて時間が来ると、ふたたび子どもたちは列をつくり、ふわっと力の抜けた表情のまま客席へと向かっていったのでした。

●この事例ではこんなことに焦点を当てて紹介しました

*この例のように、子どもたちがその場で必要としているものをしっかりと察知して、その欲求に適切に応えてあげる場面をたくさん用意できると、先生の指示は自分に深い満足をもたらしてくれるのだと子どもたちは無意識に理解します。そして、先生に対して心からの信頼と尊敬の念を抱くようになり、信頼に貫かれた学びの共同体が誕生するのです。低学年の早い段階でこのような共同体を育むことが、その後の学びを大きく左右することになります。

*緊張とリラックスが子どもたちの生活の基調をなしていることを理解すると、生活の様々な場面で子どもたちを適切に導くことができるようになります。横浜シュタイナー学園の100分間の主要教科授業が低学年から可能なのも、リズムカルに緩急を往復する授業構成をとっているからです。慣習にとらわれずに、子どもたちの本質に立ち戻ってよりよい学び方を見つけています。

●ESDやSDGsとの関わりでは…

*子ども時代に、「守られた安全な場所に自分はいる、ここには安心できる場所がある」という経験をたくさんできた子どもは、自分の内面にも誰からも脅かされない守られた空間を築くことができます。これは大人になって、大きな課題や危機に直面したときに、自分を失わず、適切に対処できる能力になるのです。

そうじの時間、家づくりの時間

—先生の段取りが子どもたちの心を自由にする— 2年生の掃除と3年生の家づくり授業より

子どもたちが行う活動の手順を先生が事前に時間をかけて考えておき、子どもたちが理解できるように具体的に指示することで、子どもたちがストレスなく共同作業できるプラットフォームができあがります。このような秩序のなかで喜びをもって活動するとき、子どもたちは〈自由〉を体験しているのです。学園のそうじの時間、3年生の家づくり授業を例に見ていきましょう。

掃除の時間（2年生）

お弁当の後に掃除の時間がやってきます。2年生の担当は、校舎2階にある自分たちの教室、そして4つの教室の入り口と階段をつなぐ小ホールです。四角いホールの二面には木製の教室の扉が2つずつ並び、教室に面していない二面にはそれぞれ男女のトイレの入り口と階段があります。天井にはあたたかな白熱灯色の電灯がともっています。

先生は子どもたちを教室に集めて言いました。「これからみんなで掃除をして学校をきれいにしよう。最初に一人ひとり椅子を黒板の前に運んで、運んだ人から順に机も黒板側に運びましょう。机は二人で協力して運ぶよ」。先生の合図を受けて、総がかりで椅子と机の移動が始まりました。椅子と机を別々に運ぶのは、2年生が無理せずに運べるような配慮です。「椅子が痛くないように、床にぶつからないように運ぶといいね」と先生が声をかけます。子どもたちは足下に目を落とし、気を付けながら運んでいきます。

一通り移動が済んだ頃合いを見て、先生はふたたび子どもたちを集め、「じゃあこれから、教室と2階のホールの係に分かれよう。これから呼ばれた人はこちら側に集まって。その人たちは教室係さんだ。呼ばれなかった人はホール係さんだから、こっちに集まって」。先生は事前に教室とホールの広さと掃除の作業量を見積もって、子どもたちの配分を考えておきました。整然と二手に分かれた子どもたちは、先生を見上げて次の言葉を待っています。「アオイはほうきの係、ケントはちりとり、クミは机はこび係…」、先生は順番に役割を振っていました。



担当が決まると、ほうき係、ちりとりの係の子どもたちははずむように倉庫に道具を取りに行き、やがて掃き掃除が始まりました。「あっ、まだごみがあるよ。そこにも」、「わかった！いま行くから」などと言葉を交わしあいながら、子どもたちは喜々として掃除を進めていきます。

ホールの方では、置かれている長机を移動しながら、ごみを少しずつホールの中央に掃き寄せています。掃き終わったスペースは雑巾で水拭きしていきま。ホールにはお弁当を食べ終わった他のクラスの子もたちが行き交うので、交通整理も必要です。子どもたちは先生の指示を心得て、手順よく作業を進めていきます。

教室では、掃き終わった壁際のスペースに机が並べられて、明日のための教室準備が整えられていきます。机が運び出されて再び床が見えてきた黒板前のスペースでは、集められたごみをきれいにちりとりに入れようとケントとアオイが奮闘中です。思いがけずたくさんのごみが集まったので、ほうき係さんたちの顔には誇らしげな表情が浮かんでいます。やがてホールの掃除を終えた子どもたちが教室に戻り、「先生、掃除が終わりました！」と報告します。その顔は本当に満足げ。子どもたちはみんな、掃除が大好きなのです。^{*1}

みんなの家をつくろう！（3年生）

3年生になって「暮らしと仕事」という授業が始まると、先生も子どもたちもとても忙しくなります。近くの里山で摘んだヨモギで団子をつくったり、谷戸の田んぼでの稲作や畑づくりで外に出かける機会も多いし、収穫した米を手作業で脱穀したり、稲わらをなつて正月飾りにしたり、左官、指物細工、豆腐づくりなど、職人さんの仕事を教えてもらったりと、たくさん体験が待っています。その学びのハイライトとも言えるものが、「家づくり」の授業です。実際に自分たちが中に入って、雨風を防ぐことができる家を建てるのです。家の材料は、里山愛護会のおじさんたちと力持ちのお父さんたち（お母さんも）に手伝ってもらい、里山の竹林にある太い竹を子どもたち自身で切り出します。竹は水分が減って固くなる秋が切り時です。秋晴れの一日、ヘルメットに軍手姿の子どもたちが協力して専用ののこぎりで竹を切り倒し、力を合わせて里山愛護会の軽トラックのところまで運び下ろしました。

さて、今日もその竹を使った作業が続いています。朝、先生は教室で家づく

*1 子どもたちは掃除が大好き：もちろんお家でも子どもたちが掃除好きとは限りません。日々のリズムのなかの秩序と安心感があるからこそ、自分が役立つことの誇らしさへの思いが際立つのでしょうか。

りの今日の仕事を子どもたちと確認し、子どもたちをいつもの4グループに分けました。先生はいろいろ考えて、四角いかたちの山小屋のような家をつくろうと決めていました。クラスは15人。4名ずつにグループを分けると4つのグループができ、柱や壁をきれいに分担して作業を進められるだろうと考えたのです。グループは無作為に分けておいてから、それぞれのグループによく動けそうな子どもが入るようにそれとなく調整してあります。同じグループで作業を進めているので、だんだん互いの息も合ってきています。

みんなが校庭に移動していくと、ハナミズキの梢の間から家の柱が見えてきました。地面を掘り抜いてつくった穴に4本の太い柱が立って、その頂に4本の梁がわたっています。その横にはシートをかぶった竹が積まれています。太い立派な竹は70本もあるのですが、事前に使わない竹は校舎の隅に立てかけて片づけておきました。こうすれば作業スペースも十分にとれて、作業の安全性も高まりますし、他の子どもたちの遊びのじゃまにもならないでしょう。

先生は4本の柱の前に4つのグループを集めて、皆で詩を唱えました。

ここに建つわたしたちの家
この下で良いことがおこなわれますように
悪いものが入りこみませんように
ここに出入りするすべての人に
よろこびとめぐみがありますように
この下では 心やすらぎ
人はしずかに語ります
そしてわたしたちは家と
家をつくる手足をあたえてくれた
神様に感謝します

皆の気持ちが家づくりに向かいます。4つのグループはさっと分かれて、教室で打ち合わせた今日の作業に手際よく取りかかります。決められた長さに竹を切り、それを二つに割って壁の材料を準備するのが今日の仕事です。子どもたちは、竹を切る台にするレンガを取りに行く子、のこぎりを取りに行く子、材料の竹を取りに行く子、竹の長さを測るために1mの紐と定規を取りに行く子に分かれて、手際よく準備を進めていきます。

3つのレンガを組み合わせて台にし、そこに長い竹を寝かせ、2人の子どもたちがまたがって支えます。まるで魔法のほうきの二人乗りのようで、微笑ましい光景です。もうひとりはこのこぎりを持って竹を引く担当。もうひよりは切

り方が曲がらないように傍らで目を光らせ、監督する役目です。全員が役割をもって仕事に当たる姿は小さな職人集団のよう。4グループとも、ぶらぶらしている子はひとりもいません。1年生のときからの配慮の行き届いた段取りに支えられ、いろいろな作業に協力して取り組んできた体験の積み重ねが、子どもたちの一体感の秘密なのでしょう。

この見事なフォーメーションは最初から出来上がったのではなく、そこにはそれなりの試行錯誤がありました。竹切り作業の初日は、「竹はのこぎりで切ろう。どうやったらうまく切れるか、試しながらやってみよう」と伝えるだけに留めました。先生は子どもたちがストレスなく体験できることを大切にしていますが、子どもたちが上手なやり方を自分たちで発見していく余白は十分に残したいと考えています。ですから、ときには失敗も起こります。

いまユウタが引いているのこぎりは、刃にひびが入っていてちょっと切りにくいのです。これは初日に、切り口に対しこのこぎりが斜めになりすぎて、刃がしなって割れてしまったのです。先生はそののこぎりをみんなに示して、「こういうふうに斜めにしすぎると、のこぎりは壊れてしまうね。ひびの入ったのこぎりだと竹が切りにくくなるよ」と言いました。そして、「他のグループもどんな具合か、こののこぎりを使ってご覧」と、のこぎりをあえて交換させました。具合が悪くなったのこぎりの使い勝手がどんなものか、皆が体験できるように考えたのです。こうして、道具を正しく扱うことの大切さを子どもたちは学び、あらためて正しい使い方を学び直すことで、作業への身の入り方も変わっていきます。

さて、作業に熱が入り始めた頃、校庭の入り口から背広を着た紳士が3人、専科と事務の先生に引率されて現れました。今日はめずらしく、議員さんが見学にいらっしゃったのです。紳士たちは小さな校庭に入ると、子どもたちの近くまで寄って活動を見始めましたが、子どもたちは作業の手を止めようとしません。竹を支える子の中には、「だれだろう？」と紳士の方を振り向いて見ている子もいますが、作業が止まることは一度もありませんでした。紳士たちは感心した様子で、引率の先生たちに質問ははじめました。

その間にも作業は粛々と続けられ、しっかり竹に切り込みが入ったグループはその竹を上向きに立て、先生に手伝ってもらいながら、切り口になたを入れました。手が入るくらいに隙間が広がったところで、ふたりの子が割れている切り口に手をかけ、「せーのっ」と全身を使って引くと、バリバリとよい音を立てて竹は半分になりました。勢いあまって片方の男の子が転げます。みんなから楽しい笑いが起こります。男の子も笑っています。

こうして1時間以上も作業を続け、最後の壁の材料を家に立てかけて仮止

3年生の家づくりから

めすると、子どもたちから「やったあ!」「家みたいになったよ!」と、歓声が上がりました。こうして、ほとんどの作業が子どもたち自身の手によって進められていきます。子どもたちの心には「自分でできる」という自信がどんどん育っていきます。今日もきっと、晩ご飯の食卓は家づくりの誇らしげな報告でいっぱいになることでしょう。

第二部で紹介した「家づくり」は、3年生の時期に取り組まれる特徴的な活動です。以下の写真から、先生が準備した十分な配慮の下で、子どもたちが「自分たちの力で家を建てられた!」という実感できる活動が実現していることがわかりになると思います。

●この事例ではこんなことに焦点を当てて紹介しました

- * 「先生の言うことを聞くと仕事が気持ちよく運ぶ」という経験の積み重ねは、子どもたちの間に協力し合う信頼関係を育むとともに、先生への確固とした信頼の念を育てます。子どもたちは先生の言葉に心を開き、先生の言葉を尊敬と期待をもって心待ちするようになります。低学年の早い時期にこうした学びの共同体としてのクラスづくりをしっかりと行うことで、子どもたちの学びの質がぐっと深まります。
- * 敬愛する大人の指示に自発的に従っているとき、その子の内面は自由です。居心地よく整えられた秩序のなかで、自分自身の活動に愛情をもって取り組んでいる子どもの内面は自由を体験しているのです。とくに低学年の活動においては、このような経験をどれだけ子どもたちにもたらすことができるかが要点となります。
- * 「自分でできた」という体験が、すべての学びの基本です。先生は、子どもたちの現在の能力を見極めて課題を考え、段取りや配分の準備に十分な時間をとります。けれどももちろん、実際の授業や作業では、想定外の出来事が起きたり、うまく運ばないこともたくさんあります。その想定外の出来事をユーモアで受け止め、子どもたちの学びに織り込んでいくことができると、授業や活動は生き生きとしたものになります。

●ESD やSDGs との関わりでは…

- * 地球規模の課題であろうと地域の課題であろうと、複雑化する課題に取り組むためには他者との協力が不可欠です。この事例のように、低学年のうちから共同作業の成功体験や楽しさを繰り返し経験していくことで、困難な状況下でも「きつとうまく行く」「きっとできる」という前向きさが自然に育まれていきます。
- * 子ども時代に自分自身の行為に愛情をたくさん注いだ経験は、大人になってから様々な社会的な課題に取り組む際に必要な集中力や粘り強さの基礎となります。



柱と壁材を立てるための穴を掘る子どもたち。



4つのグループに分かれて柱を立てています。



竹を押さえる役と切る役が協力しあって作業します。



家の中に据えるベンチにする太い竹を切ります。



できあがったベンチの座り心地を確かめています。



入口に米づくり授業で収穫したわらのしめ飾りを飾りました。

うたとイメージの体育室

—低学年の運動遊びはイメージづくりと空気を大切に— 1年生の運動遊びより

運動というと、得意不得意がはっきり分かれるものですが、横浜シュタイナー学園では運動の時間をどの子も楽しみにしています。歌と音楽、物語が織りなす「うたとイメージでつくられた体育室」が子どもたちを待っているからです。ひとりひとりが心から楽しみ、仲間を応援し、運動能力も高まる魔法の体育室を紹介しましょう。

朝のメイン授業の後、20分の休み時間が終わると、遊びに出ていた子どもたちが戻ってきて、教室が活気に満ちてきました。先生は子どもたちを椅子に座らせ、みんなの呼吸が落ち着いたことを見て取ると言いました。「これからおひさまの部屋（下の階にある小ホール）に行きましょう。ケントとハルナとユウタは平均台を運んで。ユウカはお手玉を運んでください。」その間に、もう子どもたちはいつもの順番で並び始めました。楽しげに、しかし落ち着いた声で先生が歌い始めました。

ポッキン、パッキン、ポッキン、パッキン、
小人がふくろをもって森に行く 朝早くから
クックと枝から鳥が呼ぶ
どこへ行くのか小人さん
穴からねずみがこっそりのぞく…

歌は空間の魔法使いです。陽気な歌から豊かな色彩が生まれ、森をわたる風が吹いてくるようです。子どもたちはたちまち異空間に引き込まれ、一緒に声をあわせます。子どもたちは小人になりきって、その列は教室を出て、テンポよく行進して行きます。

ポッキン、パッキン、ポッキン、パッキン、
小人がふくろをもって森に行く 朝早くから…

だんだん楽しくなって、子どもたちの声は大きくなりましたが、エスカレーターすることはありません。下の階では事務員さんが陽気な歌声を聞きつけて、事務所のドアを開けて覗きました。やがて階段の上方から列の先頭が現れました。それに続いて、長い平均台を一本ずつ抱えた三人が慎重に歩を進めてきます。かわいい歌声がお祭りのパレードのように事務所の前を通り過ぎて、隣の

小ホールに遠ざかっていきます。

小人がおどる
トッテン、タッテン、ビッテン、ポー
おっと ひっくりかえり ケラケラ笑う
ワハハハ ホー！

ほがらかな笑いがホールに響きます。子どもたちは荷物を置いて手をつなぎ、大きな輪をつくりました。先生は身軽に体全体を左に向け、さりげなく方向を示すと、今度は水車の歌をゆっくり歌い始めました。

水車がまわる 水車がまわる
川の流れで くるくるとー

単純なメロディーとリズムなのに、それだけでふんわりと居心地のよい空間が生まれます。歌いながら、大きな輪が右回りに回ります。歌の節目で先生が向きを変え、回転は反転します。

水車がまわる 水車がまわる
川の流れで くるくるとー

大きな輪が行ったり来たり。先生は歌のテンポをあげ、小刻みなステップで輪の回転を速めます。子どもたちは、喜びを身体中にみなぎらせ、はずむようにその動きについていきます。すると先生は素早く向きを反転させ、大きくスローダウンして、今度は重々しい足取りになりました。子どもたちはその落差を面白がりながら、大男になったような気分で歩調をあわせます。

右に、左に、すばやく、ゆったりと。クラス全員の姿が映し出される大きな輪の温かさと、歌が生み出す穏やかで安心できる空間、そして、さまざまリズムが生み出す朗らかな気分。それらが、子どもたちがいちばん触れてほしい琴線をそっとかき鳴らします。子どもたちはうっとりしたような表情を浮かべて、先生の次の指示を待っています。

先生がオカリナを取り出すと、子どもたちは「あれだ！」という表情になり、ちょっと身構えました。小鳥の声のようにオカリナが鳴り出すと、わあっと歓声を上げながら子どもたちは一斉に散りました。あちらに、こちらに、部屋中を自由に走り回りながら、子どもたちは耳をそばだてて先生に注意を向けて

います。ふいにオカリナが止み、子どもたちはわれ先に先生の周りに集まります。そしてオカリナが鳴り、同じことが繰り返されます。発散と集中、集中と発散、たったこれだけのことですが、このリズムカルな繰り返しが子どもたちはしびれるほど好きなのです。

やがてオカリナがしまわれ、高揚した子どもたちの息が整う間に、先生は平均台をU字型に並べて、笛を取り出しました。子どもたちはかごに入ったお手玉をめいめい手に取り、平均台の端から長い列をつくりました。

「宝物を落とさないように、橋をわたって、向こうの国まで届けよう」。先頭のユウカが平均台に上がり、頭の上に赤いお手玉を乗せてバランスをとりました。笛が鳴ります。ポー、ポー、ポ、ポー。それだけで谷にかかる橋をわたる小人たちにふさわしい気分が空間を包みます。すばやくわたる子、バランスを取りながら進む子、宝を落としそうになって手でおさえる子、小さなドラマが次々に生まれ、笑いが起こり、やがて全員がわたり終えました。

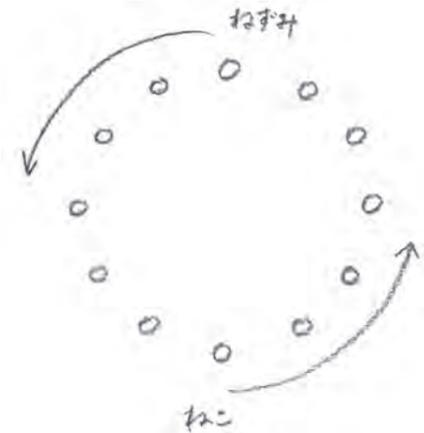
さて、最後は平均台をかたづけてかけっこをします。子どもたちはふたたび大きな輪をつくりました。

「アオイはネズミ、ケントはネコになって」。円周の対面にいるふたりの子どもが呼ばれ、先生は走る方向を身振りで示すとまた歌い出しました。

ねこがねずみをねらってるー
へいのまわりでうろうろー
はしれ ねずみ はしれ ねずみ
ねこにつかまらないでー

「パン」。歌が終わると同時に先生が手を打つと、ネズミもネコも輪の外へ出て、さっと走り始めました。ケントは足が速いのですが、円の反対側を走るアオイにはさすがに追いつきません。追いつかないまま一周してもとの位置に戻ると、ケントは隣のクミにタッチしました。今度はクミがネコになります。クミが走り始めると同時に、アオイが一周してユウカにタッチ。ユウカがネズミになって走ります。

ネズミはネコにつかまらず、ネコはネズミをつかまえられずに全員が走り終えました。それでもまた歌がはじまると、子どもたちはわくわくしながらネズ



ミを応援してしまうのです。足の遅い子も、気の弱い子も、臆すことなくかけっこに興じ、全身で走る喜びを味わっています。

はしれ！ ねずみ はしれ！ ねずみ

その声は、飽くことなく繰り返され、ホールに響いていました。

●この事例ではこんなことに焦点を当てて紹介しました

- * 歌や音楽、イメージ豊かな言葉は、教科によらずすべての活動を豊かにする大切な素材です。とくに集団で活動するとき、歌や音楽を上手に使うと全員が安心して集える空間をつくることができます。ネコとネズミの例では、かけっこの前に歌がための時間をつくりだし、ネコに追われるネズミのイメージが走り出す前のわくわく感と重なって、深い体験に結びつきます。
- * 大きな声で歌う必要はなく、その歌にあった声を探して歌うことを大切にしています。先生がそのような歌えば、子どもたちが大声でなったりすることはありません。
- * 低学年の体育では、できるだけ競わせる要素は取り除き、ひとりひとりが喜んで身体を動かせるように工夫します。身体活動と喜びの感情が結びつくことが重要です。こうして積み上げられた体験を通して、誰もが身体を使うことが好きになり、無理なく身体能力を伸ばすことができます。

●ESD や SDGs との関わりでは…

- * 音楽や物語などの芸術が教育活動に欠かせない理由は、芸術がいろいろな要素をひとつの全体性へとまとめあげる力を持っているからです。ESD や SDGs を推進する際に重要なのは、一見ばらばらの事象を意味ある全体へと統合する力です。世界のなかで持続不可能性として現れているものの本質は、世界の全体性から切り離されてしまった人間の生き様だからです。
- * 芸術的なアプローチは、人間の全体性を回復し、世界と人間を和解させる力をもっています。ESD では、知識だけでなく、価値観や行動様式、ライフスタイルそのものを変容させることが目指されています。ESD は芸術的なアプローチが活躍する検舞台なのです。
- * 解決すべき世界の課題を細かく定めた SDGs に取り組む際にも、個別のターゲットへの取り組みを超えた大きな視野をもつことが大切です。そのときにも芸術的な感性が私たちに力を与えてくれるでしょう。

畑づくりの授業とESDとの関連性 横山義宏 (3年生担任)

シュタイナー学校では、3年生で「暮らしと仕事」という学びがある。狩猟採集、農耕、酪農、収穫したものでパンを作ったり、また人間が生み出してきた生活に必要な道具についてなど、人類が歩んできた暮らしをなぞる学びを行う。

農耕についての学びは具体的には、畑や田んぼでの作業になる。畑は、近隣の農家の土地を使わせていただき、農家の方の指導を受け作業を行っている。田んぼは、森の中にあり、森・里山の愛護会の方々の田んぼをお借りし、田植えから収穫まで指導を受けている。こうした地域と結びついて学習を進めていく一方、校庭に小さな畑を作り作物を育てている。ここでは、校庭での畑作りについて話していきたい。

5月、校庭の一角に子どもたちを集めて作業を始めた。畑を作る予定の場所を取り囲んで立っている子どもたちに、

「みんなは昔の人だ。畑を作ってみよう。」

子どもたちは

「??？」

「スコップは？」

「昔はスコップなどなかったから手でやろう。」

手で固い土と取り組むがうまくいかない。校庭にある石や木の枝を使うことを思いつき、それらで作業を続けた。道具を使うことで、ゆっくりだが手で行うより作業ははかどる。でも遅々たる歩み。次の日も、またその次の日も同様に作業を続けた。少し掘っては土を手でほぐし。1週間毎日作業を続け耕された面が広がってきた。子どもたちの表情も明るくなる。次の1週間は、より積極性が出て来る。毎日の作業を楽しみにするようになる。3週目には小さな畑がほぼ耕され、土もほぐされ地面に空気ははいりやわらかくなる。最初の地面とはかなり違い、土をさわる子どもたちの表情に喜びがあふれる。目がきらきらと輝いていた。4週目によくややくという道具を使い、その意義も体験し畑を完成させた。

最初から鋤を使うことなく、3週間の間、手や棒で作業を続けることで、これから種をまく土に対する愛着が強く湧いたように感じている。じっくり時間をかけておこなったことは子どもたちの体と心にしっかりと刻印されている。

こうした作業を行う場合、「早くシャベルを使いたい」や「シャベルがあるのになあ」といって作業をしながら子どもがでてくるのではないかの懸念もあろう。今回のわたしの体験ではそういったことはなく、全員が積極的に学びに取り組むことができた。それはいったいなぜかと想定された疑問に対して考えてみた。そこでの自分なりの答えをいくつか述べたい。

まず、担任は毎日100分間の授業を行う。その中では、歌を歌い、体を動かす時間を設ける。子どもは歌を歌うこと、そして歌に合わせてリズムカルに体を動かすことが大好きである。畑作りをした5月には、たねまきの歌を歌い、鋤を入れる詩を唱えた。

種まきの歌

たねをまこう みんなのはたけに (円になって立つ)
なにをまこう なにをまこう (円を小さくし肩をくんで相談する仕草)
にんじん にんじん まきましよう (再び元の円にもどる)
たねをまこう つちをたがやし
神様のめぐみ 育てます

鋤入れの詩

母なる大地に鋤を入れ
固い大地を耕します
暗い大地のその中に
光の力が差し込むように
ひとりひとり力をこめます
光と水と空気のねどこで
いのちが再び目覚めるよう

ねがいをこめて耕します
母なる大地を耕します

作業を始める前に学びと関連した歌を歌い、詩を唱え、生き生きとした時間をつくることで、学びとの結びつきを深めることができる。

次に、畑を耕す作業を一カ月間、同じ時間帯に行ったこと。毎日毎日繰り返す事で、作業と規則的に向い合うことができたこと。子どもたちは、次の日も作業を行うことがわかっているの、「今日もたがやすぞ。土をやわらくするぞ。」と楽しみにやってくる。

一定の期間、作業を継続できることも実りを生むように思う。



お借りしている畑で全身を使って芋掘り (3年生)

子どもたちは7年生で植物、8年生で化学：植物と酸素と二酸化炭素、また9年生の化学：光合成を学ぶ。3年生での体験は、こうした高学年での自然科学の学びのしっかりとした土台となるに違いない。

上述したように3年生の子どもたちは、土と取り組み、土にいとおいさを感じていくようになった。畑や田んぼの作業を通して、土だけではなく、光や風や雨への感謝を学んでいく。体を動かし歌を歌い、詩を唱え、継続的に学びを続けることで、学びの内容が、子どもの頭だけでなく、体と心まで、深く沁みこんでいくことができたように感じる。そして、こういった活動が明日の世界を支える力になっていくと考えている。

***この記事について**
第一部で紹介した事例は、現3年生クラス担任の横山義宏に取材してまとめたものです。

ユネスコスクールの担当教員である横山が、ある研修で3年生の畑づくりの実践報告をしたところ、「うちの学校ではとてもできません。素手で土を耕そうと言ったとたんに、『やりたくない』とか『あの道具を使えば』と収集がつかなくなります」という声をいただきました。

では、それを可能にしているものはなにか、そこを明らかにしたいと考えたところから第一部の企画はスタートしました。本記事「畑づくりの授業とESDとの関連性」は、この企画のきっかけとなった報告を文書化したものです。

第二部

座談会

高学年の高度な学びの展開

—低・中学年で培われた ESD の土台から花ひらくもの—

長井麻美（9年生クラス担任）

横山義宏（3年生クラス担任）

福田憲明（保護者）

佐藤雅史（事務局長）

第一部でご紹介した低学年から中学年にかけての ESD の土台づくりは、高学年の学びにどのようにつながっていくのでしょうか。また、暗示型 ESD の特徴をもつ高学年の学びとは、どのようなものなのでしょうか。

第二部では、ユネスコスクール世界大会 ESD 優良実践事例集に選ばれた当学園の実践事例を取り上げます。この事例集は、国連 ESD の 10 年の最終年を記念して 2014 年に日本で開催された世界大会で、世界各国の参加者に配られたものです。ここに紹介された事例を通して、横浜シュタイナー学園の高学年の学びがどのように個々の単元と単元を関連付け、それらを包括したイメージ豊かな世界像を子どもたちが受け取っているのかを見たいと思います。そして、それを可能にする独自のカリキュラムと教授法に教員がどのように向き合っているのかを、座談会形式でご紹介します。

高学年の高度な学びの展開

—低・中学年で培われた ESD の土台から花ひらくもの—

第二部「高学年の高度な学びの展開」は、座談会形式でお伝えしたいと思います。発言者は、現9年生担任の長井麻美、現3年生担任の横山義宏、保護者であり教育心理の専門家である福田憲明、そして事務職員でサステナブルスクール担当の佐藤雅史（司会）の4名です。2学期の月例祭（学習発表会）終了後、ホールの会議室で収録したものです。

サステナブルスクールの課題

佐藤：今日の座談会は、横浜シュタイナー学園サステナブルスクール事業の集大成として刊行する冊子収録のために企画いたしました。

横浜シュタイナー学園は、2016年に文部科学省が公募したサステナブルスクール事業に応募して採択されました。そのとき提出した申請書に、この冊子づくりのことを事業計画として盛り込みました。

聖心女子大学の永田佳之先生は、この学園のような教育実践を「暗示的な ESD」という言葉で整理されています。すべての活動のなかに ESD が浸透し、深いところから ESD が湧き上がってくるような実践だということです。ただ、暗示型という言葉の通り、このような ESD は目に見えにくいわけです。ちょっと見ただけではどこが ESD なのかわからない。そこで、その暗示的な要素をなんとかして目に見えるようにして伝えられるようにしたい、それを横浜シュタイナー学園のサステナブル事業のゴールとして申請しました。

サステナブルスクールに要請される資質のひとつとして、「広がり（汎用性）」があります。「ESD 重点校として、あらゆる学校が活用し実践することができる可能性のある活動への意欲をもって

るか」、「実践に見いだされる工夫や方法、理論などを他の学校に拡大し協働していく高い意欲があるか」ということが要求されています。この学園の活動を目に見えるような言葉に直して他の学校にも共有できるように冊子化することで、その要請に応えたい。同時に、その作業を通して、自分たちも自らの活動を再確認できるのではないかと考えました。

低学年での ESD の土台づくりの大切さ

冊子の第一部では、横山先生の日々の活動の様子を目に見えるようなストーリーとしてまとめる作業に取り組みました。そのストーリーは一般的な ESD のイメージからは遠い内容ですが、しかし、暗示的な ESD という考え方に立つと、むしろこれこそが ESD の土台であり、ESD そのものだと思います。横山先生ご自身も感じるところがあると思いますので、



左から、佐藤雅史(司会)、福田憲明、横山義宏、長井麻美 (2018年12月15日)

今回の作業を通して大事だと思ったことや、新たな発見などがあればお聞かせください。

横山：わたしは9年間の担任の2廻り目で、現在は3年生の担任ですけれども、クラスが3年経った今、3年生という学年が低学年の総まとめのような気がしています。この学園の3年生は手足を使った作業による学びが多いのですが、それは先生の指示を聞いて手足を動かすということですね。何かひとつのことを皆でやるときによく起こるのは、ただぼーっと見ている子がいたり、遊んでいる子がいたりすることです。でも、いまの3年生クラスには、そういうことがあまりないですね。どこにその根っこがあるのかというと、1、2年生のときにできた先生と子どもたちの信頼関係です。

子どもたちは先生に対して敬意を払うことができ、人の話をよく聞くことができる。それは、1年生の頃に子どもが新しい生活でストレスを感じないように、配慮してきたことから生まれるものです。日々の生活だけではなく、学ぶ内容や教え方でも、子どもが困惑しないよう、子どもがストレスを感じないように、すべてに工夫したことによって育まれたことだと思うのです。そこが染み込んでいるので、3年生の段階で、クラス全体がきちんと仕事ができる状態になっているのだと思います。

それを感じたのは、3年生の4月によもぎ団子づくりに行ったときです。校外学習に行ったりすると、移動のときにふざけたり、現地でふざけたりということがありますが、このクラスにはそれがまったくない。学びたいことがきちんと学び取れる状態ができていないことに、「ああ、これが大事だよなあ」と感じ、それはこれまで1年生、2年生の積み重ねがあったからだと思ったのです。そのことのために1年生、2年生をやってきたわけではないのですが、結果的にその積み重ねが3年生でうんと生きてくる。

これからもそうだろうと思いますが、そういうことが大事なんじゃないかな。これから学ぶ内容にはもっとサステナブルスクールの本質に触れてくることが出てきますが、きちんと学べる姿勢ができてい



月例祭での3年生（朝のライゲンの発表）

ので、それらをさらに吸収して深く学べる子どもがたくさん生まれるだろうと思います。

よき大人への憧れを育むこと

佐藤：今日はもうひとり、ユネスコスクール活動グループ・メンバーの福田憲明さんにも同席していただきました。福田さんは横山先生のクラスにお子さんを通わせている保護者の立場、そして、大学で教育心理を教えている専門家、その両方の立場からご発言いただきます。いまの横山先生のお話では、3年生の学びにつながる準備期間としての2年間があって、それがあったから3年生の深い学びができていくということでした。今日の月例祭の発表を見ても、子どもたちが喜びに満たされて日々の活動をしている様子が伝わってきましたね。福田さんのお子さんは、お家で学校での出来事をいろいろ報告してくれますか。

福田：そうですね。3年になってから、言葉で表現することも増えましたけれど、1年生、2年生のときはエポック授業*のノートを「きょうはこれをかいた」

*エポック授業：朝の最初の約100分のメイン授業。主要教科をひとつずつ2～3週間集中して学ぶことで、先生も子どももそのテーマに集中することができる。教科書はなく、低学年のうちは先生の板書を写して鮮やかなノートに仕上げる。それらはその子の学びのポートフォリオとなる。

と見せてくれたり、面白かったことを絵に描いたり、
そうやって表現して伝えてくれていましたね。

佐藤：エポックノートって、保護者にとっては通信簿の代わりみたいなのところがありませんか。

福田：ほんとうにそうですね。ノートの1ページを見るだけで、どういう学びが展開したのか想像できます。わたしは入学前に大人のためのエポック授業体験に参加して、ちょうど横山先生と長井先生が講師だったのですが、歴史の、イギリスの産業革命の話でした。そういう授業を体験していたので、エポック授業の幅広さと深みを感じられました。だから、ノートを見るだけで、子どもと言葉でやりとりする必要があまりないというのはありますね。

佐藤：なるほど。横山先生に質問ですが、先ほど、子どもたちと先生の間で信頼関係ができてきているから、子どもたちは先生の指示によく応えられるのだと言われました。外から見ると、それはただ従順な子どもたちに見えるかもしれませんが、けれども、我々の目から見ると、とても内発的に先生の指示に従い、内発的に学んでいるという状況が生まれているわけです。それは、「ここではこうするんだ」と子どもたちに言い聞かせたからそうだったわけではないですね。では、そのような言い聞かせとこの学園での信頼関係の築き方の違いはどこにあるのでしょうか。

横山：よく言われるのは、学校に初めて来た子どもたちに先生が「君たちは今日、何のために学校に来たんだい」と聞くと、子どもたちは「勉強しに来た」と答えるわけです。それで、「なんで勉強するんだね」と先生が問いかけて、先生は「立派な大人になるためだよ」という話をします。「君たちのお父さん、お母さんを見てごらん。お父さんやお母さんは計算ができるね。だから毎日買い物ができる。君たちもそれができるようになるんだよ。」「お父さんやお母さんは本や新聞を読むね。手紙も書くね。それができるのは字を知っているからだよ。字を知っていると本を読んで勉強することもできるんだ」みたいな話をするのですね。

つまりそれは、大人に対する眼差しをつくって

るということです。両親も含めた大人一般に対して子どもたちが尊敬の眼差しをもてるような、そういう話をするわけです。「勉強しなさい」ではなくて、動機付けをきちんとしているのだと思います。

佐藤：なるほど、子どもたちの内側に憧れを生み出すような、そういう働きかけが日々なされているわけですね。

横山：そうです。永久歯が生え始めた頃の子どもたちというのは、尊敬できる大人と出会いたいという欲求を強くもっているんです。だから大事なものは、先生が、自分は子どもたちから憧れられる、学びたいと思われる存在なんだとしっかり自覚することです。「何かこの人にはあるぞ」、という深い哲学をもつように努力することが重要ではないかと思えます。

佐藤：自分たちが本当に結びつきたいと思えるような大人、そういう人たちが周囲に見つけられるような環境づくりを先生たちが努力されていることがわかりました。ではこれから、今回の中心テーマとなる、中学年・高学年の学びのなかで、いろいろな教科が有機的につながって大きな全体をつくっていくところを見ていきたいと思っていますが、そこをいま9年生担任の長井先生にお話いただけます。

学びの質が転換するポイントがある

ここに『ESD 優良実践事例集』という冊子があります。長井先生の前のクラスがちょうど9年生のとき、ユネスコスクール世界大会が日本で開かれました。そこで世界中の人たちに配るために文部科学省がつくった冊子です。その優良事例に横浜シュタイナー学園は長井先生の実践をまとめて応募し、それが掲載されました。とてもいい実践だと評価されたわけです。ただ残念なのは、掲載された情報量がわずかで、その素晴らしさが伝わりにくいのです。そこで、その事例をもっと深掘りして聞かせていただきたいと思えます。

わたしたちの後ろに、今年のユネスコスクール全国大会のポスターセッションに出展したポスターが



2014年ユネスコスクール世界大会記念『ユネスコスクール ESD 優良実践事例集』より（本誌 P.64 参照）

貼られています。中央の樹形図（次ページのポスター中央）は横浜シュタイナー学園の新しいパンフレットのためにつくられたものを転用しました。この樹形図は学園のカリキュラムを視覚的にしたのですが、プロデザイナーの保護者と長井先生が相談しながらつくったと聞きました。先ほどの3年生の横山クラスはちょうどこの真ん中のくびれのところに差し掛かっている学年ですね。長井先生、ここの交差にはどのような意味があるのですか。

長井：シュタイナー教育で「ルビコン川を渡る」と言われる成長の7年周期の2番目にやってくる転換点ですね。よき子ども時代を過ごした子たちがそれと決別して次のステップに上がり、ここから本格的な学びに向かうんだという。それが3年生から4年生の年齢です。その成長は真っ直ぐに進んでいくのではなく、絡み合って進みます。

たとえば3年生では、人間が大地に足をつけて自

分の力で生きていくことがテーマで、すべてのことを自分たちでやらなければいけない。いろいろな分野がずっと垂直に上まで行くのではなく、どの分野もぜんぶ絡み合い、頭も使い、心も使い、力も使って協力しあう。いろいろな分野をあわせていって初めて人間の営みになるということ。3年生は学んでいます。4年生になると、自分の父母の時代、祖父母の時代はどんなだったかとか、郷土学も始まり、だんだん空間・時間的な認識能力が広がってくるところに、さらにいろいろな要素が絡まってきます。世界にいるのは人間だけじゃない、動物もいるよね。4年生になると動物が視界に入ってくる。そんな3年生、4年生の学びが、こういうダイナミズムを生んでいるのだと思います。

佐藤：本当によくできた図だと思います。ちょうどこのくびれのところに質的な転換があるというわけですね。

世界と“わたし”はつながっている



世界と“わたし”はつながっている

それを実感できる9年間のカリキュラム。
その実践を支える教員と保護者のパートナーシップが
学校の一体感を生み出しています。

横浜シュタイナー学園は、横浜市緑区の大きな森のそばの小中一貫シュタイナー教育実践校です。
機関包括型でESDに取り組むサステナブルスクールとしてSDGs推進に貢献しています。
<https://yokohama-steiner.jp/>

サステナブルスクール・横浜シュタイナー学園

第10回ユネスコスクール全国大会に出展したESDポスター

長井: はい。デザイン的にはポスターを手がけてくださった学園保護者のデザイナーさんの才能の賜だと思いますけれども。

佐藤: なるほど。報告書の第一部では、このくびれの下部分を明らかにすることを試みました。そして、第二部に収録するこの座談会で明らかにしたいのが、その上の部分、低学年の土台の上にどのように高学年の豊かな学びが花開いていくかということです。その材料として、この優良事例はとてわかりやすいと思います。長井先生、この優良事例についてあらためてご説明いただけませんか。

化学・農業実習を通して地球環境を学ぶ

長井: 樹形図の交差のあたりから、自然科学的な学びが始まってきます。4年生で動物学、5年生で植物学、6年生から7年生にかけて鉱物。6年生で初めて物理の学びが始まり、7年生で化学が始まります。7年生の化学は燃焼から始めるのですが、人間の身体の中にも燃えているものがあるということで、栄養学を同時に学びます。

そのように科学的分野が広がりながら個別化・専門化していくのですが、最終的には9年生で、子どもたちは自分たちが学んできた道筋を振り返って、「ああ、自分はこういう学びをしてきたんだ」と思えるような時期に入り始めている感じがしています。樹形図の上のところ、それまで段階的に進めてきた自然科学の学びが、9年生の化学の学びのなかで5年生、6年生で学んだ植物に戻ってくる感じなんです。

いま、わたしはクラスに受験生を抱えているので、「先生、わかんない!」と高校受験に出る化学とか物理の問題集を見せられます。それを見ると、「こんなにやっているんだね、世の中の中学生は。わあ難しい!」なんて思います(笑)。それと比べれば、横浜シュタイナー学園の化学の学びは本当にエッセンスだけです。そのエッセンスでいちばん大事なものは、植物と地球環境と人間だろうとわたしは捉えています。

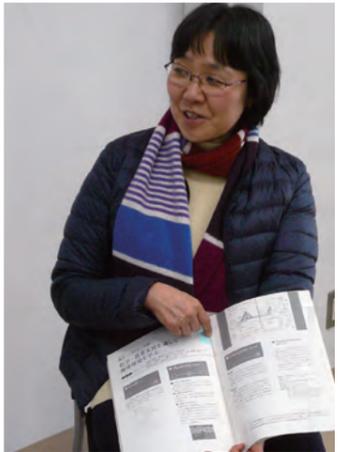
5年、6年で植物を学んだ後、その植物を7年生で

燃やすんです。燃やすと物質はばらばらになって、いろいろな要素に分かれていく。それをまた元に戻したりすることが化学の学びになっていく。そのように学んでみると、「この世の中を生き生きと生かしてくれているのは植物なんだ」というところに至る感じなんです。9年生の栄養学では、人間に必要な三大栄養素やビタミンなどを学びますが、結局のところ、そのすべてをわたしたちは植物から得ているのだと分かります。

すべての物質循環は植物に至る

だから7年生の燃焼実験では、植物をたくさん燃やすわけです。根、茎、葉、花、すべて燃やしてみる。そうすると、植物をつくっている要素がやって来たところへ還っていく。植物はもともと何によってできたのかを考えると、太陽の光と熱と大地からもらうミネラル、そして水分や空気、いろいろなものが結集して植物と成らしめている。それを燃やすことで、灰が残ってまたミネラルになる。燃焼で光が放たれ、熱が出る。太陽が植物に投げかけていたことと反対のことが起こって、植物をつくっているものがすべてもとのところへ還っていくイメージです。

7年生で学んだそういうイメージをもって、8年生ではさらに物質を酸とアルカリに分けてみる。灰とは何なんだろう、酸とは何なんだろう。一度分かれたものの特徴を、いろいろな実験によって捉えていくのです。そこから見えてくるのは、アルカリのなかでも石灰という人間と密接なつながりのある物質が、ぐるぐると地球環境を循環していることです。様々な



生物によって生成され、それが大地に溶けて堆積して石灰岩となり、人間によってまた引き出され、燃やされて生石灰になり、こねくり回されて漆喰になる。そんなふうに地球上を石灰がいろいろなかたちで巡っている。そのような循環のイメージが、9年生になると、栄養を化学として捉える学びにつながります。タンパク質とはなんだろう、脂質とは、糖質とは。そしてそれらをすべて生み出せるのは、この地球上では植物だけなんだというところに至り、では植物は地球にどんなことをしているのかと言えば、酸素を生み出してくれる唯一の存在でもあるということが見えてくる。そこから環境について考えるわけです。

9年生になると農業実習にも行きます。わたしたちは一期生のときからバイオダイナミック農場*に行っていますので、地球をひとつの生き物として考えていく農法を、子どもたちが実際に手伝いながら感じることができます。畑の野菜を通して植物を感じ、牛の世話の通して動物を感じ、農場が季節のなかで営まれていることを感じることで、今までの机上の学びや実験での学びとつながり、高学年の学びが統合されていくのです。

化学の詩

こうして子どもたちは最終的に、「植物ってなんてすごいんだろう」と感想をもちます。先日、ちょうど6期生も化学のエポックが終わったのですが、1期生も6期生も9年生の化学を終えた後に、「今回の学びについて詩を書いてください」と言ったのです。子どもたちは「え？」と言いながらも、いい詩を書きます。今日はそれをもってきました。

まず、先ほどの優良事例集に載った一期生の生徒の感想を読みますね。

「今回有機化学を学んで、化学というものの印象が結構変わりました。いままで化学というとなんだかすべてを論理的に片づけるというようなイメージが

あったのですが、今回学んでみて、化学ってすごく壮大で哲学的なところにつながるんだなと思いました。たくさんの実験を通して私がいちばん気に入ったのは顕微鏡ですね。片栗粉や砂糖など、とてもきれいでした。普通に見ているものとレンズを通して見るものでは結構違って面白かったです。ヨウ素溶液に反応しどす黒くなったのも、顕微鏡で見るととても幻想的で感動しました。詩を書くというのは、はじめたいへんだなと思っていたのですが、やってみると意外に楽しく時が経つのも忘れて机の前に座り、独り言のように声に出しながらつくっていました。もっと具体的に化学のことを書くつもりだったのですが、なんだか壮大なものになってしまいました。今回も面白かったです。ありがとうございます。」

そしてその生徒の詩がこれです。

植物や動物
自然界の全てのものが
お互いを支え合いながら生きている
何かが欠けると全てが壊れてしまう
この完璧な世界の設計図を
描いたのは誰だろう
なぜバランスが現れたその世界に
人間を加えたのだろう
自分が創り上げた美しい世界を
壊していく存在と知りながら
しかし 信じたのだ
地を従えるという責任を与えて
(1期生女子)

今年の6期生は1期生とは雰囲気違う子たちで

*バイオダイナミック農業：農場とその周辺の山林や牧草地、涸沼などを完結した生態系と考え、生態系内の循環を健全化することで地力と農産物の質を高める農業。ルドルフ・シュタイナーが1924年に提唱し、近代有機農業運動の源流となった。日本にも各地に実践農場がある。

すが、やはりいい詩を書きました。次に紹介する生徒は高校受験をする予定です。いろいろな受験勉強をしていて、この夏も夏期講習に行っただけで学んできました。これはそういう前提で書かれた感想です。

「今回の化学は〈有機化学〉というタイトルだったので、化学の有機物をやるのかなと思っていたら、植物学とか栄養学とか歴史とか、色々な分野のことをひっばってきておりまぜていたので、少し驚きました。やっぱり夏期講習で習うような一部のブツブツの知識とは違って、流れてつながってるような感じなので、本当にスルスルと頭の中に入ってくるな、とあらためて実感しました。ありがとうございます！」

その子の詩です。

自然は人間にとって
大きな玉手箱のようなものだと思う。
人間の暮らしの中で
時にははじけるような香りや味の食べ物となり、
時には包んでくれるような住み処となる。
またある時は
人間の手には負えないような脅威となった。
そんな中でも人間にとってこの玉手箱は
大切な存在であり続けた。

しかし、時が流れるにつれて変わっていった。
人は自然を傷つけてまでも
自分自身の欲望のままに突き進んだ。
はっと顔を上げ空を見上げると

そこは一面灰色の世界になっていた。

そんなことがないように
何が出来るか考えよう。
七色に光る玉手箱のために。

(6期生女子)

ほかの生徒のも紹介します。これは男の子です。

自分が中心
そう思っているけれど
自分の隣には別の者がいる
わたしたちは隣同士
かけ離れているようにも
近いようにも思える

(6期生男子)

植物はわれわれに食を司り
植物はわれわれに力をくれ
植物はわれわれに住まいを与える
植物はわれわれに「何か」をくれる
これが本当の調和という物なのか

(6期生男子)

有機物は燃やすと燃える物質
燃やすと二酸化炭素を発生させ、炭を残す物質
それは空気と栄養になり、有機物体内にこの
空気と栄養を中に取り込む
そして有機物を燃やすと、
又、二酸化炭素と灰になる
この流れは世の中を巡り、



月例祭で歌う9年生 (第6期生)

そして私たちの支えでもある

(6期生女子)

これは有機化学の内容を一所懸命考えて書いた詩ですね。次のものなかなかです。

昔は人間も動物と同じように

地球と調和して生きていた

しだいに人々は己に興味を抱いた

その意識は善にもなり 悪にもなった

永い時の流れの中で

人間はだんだん 己にこだわり始めた

こだわりはからまり合いふくれ上がった結果

幾度も憎悪と傷を作り続け

自然を破壊した

こだわりは人間に調和を忘れさせた

人間はこの大いなる忘れ物に

気づき立ち上がらなければ

この星の命に止めを刺すと同時に

自らの種族を滅ぼすだろう

(6期生女子)

やらねばならぬ ことがある

人々は自分で考え これを行う

人は初めから 分かっている

それぞれが

限りある地球の為 宇宙の為にすることを

資源は永遠では ないのだから

(6期生男子)

すべてはつながっている

一同：まさに ESD ですね。

長井：そうなんです。「ESD をやろう」なんて思わなくても、なってしまう。やればやるだけ返ってくるなという手応えがあります。先ほどの受験する生徒が、「これが出るから覚えなさい」という断片の知識を記憶する学びを外で体験して、初めて学園の授業

が「すべてがひと続きなんだよ」と言っているのだとわかったと言っていました。その生徒の今回の感想には、これまで彼女が書いた感想で初めて「ありがとうございました」と書いてありました(笑)。

横山：すごいですね。私にはこの感想を引き出す自信がないです。導き方が素晴らしいのでしょうか。

長井：わたしのなかには、植物に始まり植物に終わるんだなという考えが前からありました。わたしは理科が本当に苦手で苦手で、実験が成功すると「先生がいちばん嬉しそうですね」と生徒に言われるぐらいなんです。アルコールの蒸留実験などもたいへんな思いをしてやりました。でも、彼らは実験もすぐ楽しんでいました、わたしの持っているイメージは伝えられたと思います。

農場に行ったときもそれを感じましたね。今回はソフィアファームという北海道のバイオダイナミック農場で、そこは乳牛を多く飼っている農場でした。その農場主の理想、山ごと土地を買って地球を癒やすんだ。肥料なども持ち込まず、持ち出さず、すべてそこにあるもので回して行って、有機的に命を育てて、それをみんなに分けていく。そこに若者が来てくれて、一緒に働いてくれて、この考え方を広げてくれたらどんなにいいだろう。そんな話を作業の合間にしてくれるので、子どもたちにも伝わったと思います。「すべてはつながっているんだよね」と。地球全体がひとつにつながっていると、その大地を見てわかった。9年生はそれが肝だなと思いました。

カリキュラムを統合するイメージの力

佐藤：今回、この取材の準備を進めていて大きな発見がありました。長井先生の優良事例はヴァルドルフ教育のカリキュラムに沿って編まれているので、他の先生にも取材させてもらって、分担してもらえたらと思うていたんです。ところが、長井先生から「それは無理だよ」と言われてしまったのです。「ベースはヴァルドルフのカリキュラムだけど、それを通してこのビジョンを創り出しているのはわたし

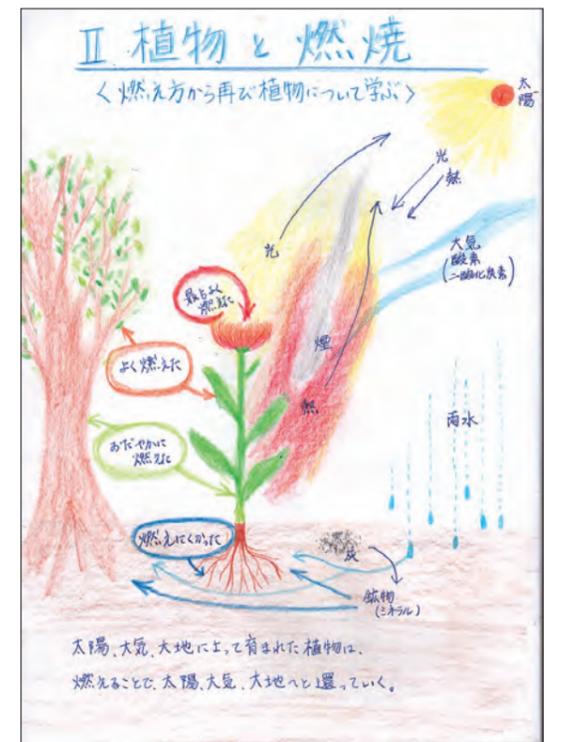
自身だから。他の先生はその先生の異なるビジョンをもって授業しているのだから、この事例を説明できるのはわたししかいない」と言われたのです。長井先生、そのことをもう少し話してくださいませんか。

長井：私は理科は苦手なんですけれども、この「つながっている」という感覚は5年生、6年生くらいから感じていました。7年生の燃焼からはたくさんインスピレーションをもらいました。これは優良事例集に紹介したノートの最初にある絵(右)ですが、燃焼の学びのまとめです。この発想から、では植物ってどういう存在なの、という問いが5年生からずっとつながっていくわけですね。それが栄養学を通して、わたしたち人間と植物の関係がつながる。わたしたちはたとえ肉を食べていても、植物を食べている動物の肉を食べているわけで、間接的に植物を食べているのと同じです。そして、いま地球温暖化と言われている地球を本当に癒やしてくれているのが植物なんだということにつながるなと思いました。

これは周りの先生たちにも伝えていきます。燃焼実験をやる先生には、「9年生になったらこうなるからすごく大事なんだよ」と、わたしなりに伝道しているつもりです。

横山：長井先生が「それはわたしだから話せること」というのは、その通りだなと思います。それは、このカリキュラムを通して長井先生が世界をどう見ているのかということだとわたしは思うんです。最初から分かっている場合もあると思いますし、やっている過程で発見できる場合もある。カリキュラムを1年生から積み重ねていくうちにだんだん気づきがあって、5、6、7年と積み重ねていくとまた気づきがあってというふうに。

そして重要なのは、長井先生は一期生の担任なので、それを自分で発見していったわけです。発見者だから、「わあ！」という喜びが伝えられる。わたしたち他の教員は長井先生から話を聞くだけで、自分で発見していない。だからそのエネルギーはぜんぜん違うと思います。



「植物と燃焼」ノートの扉の絵 (一期生9年生女子)

長井：確かに、「そうやらなきやいけなかな」と受け身になってしまうことはありますね。

横山：だからその人が、どのように自分はカリキュラムと取り組むのかと格闘することで、力が湧いてくるのだと思うんです。長井先生の場合は植物を通していろいろなお話を聞いた、その姿勢が子どもたちに伝わった。だからどの担任でも同じことが成せるわけではなくて、これは長井先生の世界なんだと思うんです。

佐藤：そして、横山先生は横山先生で、別の分野でご自身のビジョンをつくっているわけですね。

横山：ええ。

長井：このカリキュラムのすごさは、結局、ひとりひとりの教師がそこから自分の発見をしていて、自分という楽器を通してクラスの子どもたちにその発見を伝えられることですね。それはそれぞれ一期一会なので、「長井がやっていたことがすごいからみ

んなそれをやりましょう」ではない。横山先生が気づいて発見したこともまた、子どもたちにすごく大きな影響を与える。根幹にあるこのカリキュラムが、そのように大人たちに気づきや学びを促してくれる内容だからですね、きっと。

横山：わたしもそう思います。

長井：誰でも同じことができるわけじゃない。けれども、このカリキュラムやその背景をよく理解して子どもの前に立とうと準備すれば、その人その人の分野で開花するものがある、それが子どもたちによいかたちで伝わっていくのではないか。

横山：はい、そう思います。

低学年の学びとのつながり

佐藤：本当は横山先生にもそういうお話をさせていただきたいのですが、すでに時間が迫っています。先ほど低学年の土台づくりの話をしましたけれども、その積み上げがこの優良事例の取り組みを支えているなという実感はありますか。

長井：もちろんありますね。低学年の先生方は、四季折々のライゲンを考えて、教室のなかに季節感を持ち込むじゃないですか。教室には季節のテーブルもあるし、冬なら冬らしい遊びをするし、季節の歌も歌いライゲンをします。子どもたちにとって大事なのは、この季節感を感じるということです。学校全体でも四季の祝祭をとても大事にしていますよね。あんなやんちゃな9年生も、「一年の祝祭がひとつ終わっていくと、だんだん卒業が来るなって気がする」なんて言っています。それくらい祝祭が彼らの血肉になっている。

低学年のときには小人や動物のお話をうんと聞いて、思い切りメルヘンの世界に浸る。そういう世界



上：2年生の手仕事。一対一の手ほどきで、先生との絆が深まっていく。
下：9年生の手仕事。高学年は手から自然に作品が生まれ出てくるよう。

をたっぷり経験すると、大いばりで世界の王様みたいにしている人間というより、いろいろなものに生かされているのが人間という存在だと感じるのではないのでしょうか。いい意味で、子どもたちの内面に根雪のように積み重なっている気分が生まれるのだと思います。やがて4年生になると動物学が始まる。動物学はすごく大事ですね。動物になりきる子が出てきたりして、みんな動物が大好きになる。5年生に

なって植物への関心が育ってくると、たとえば地衣類なんていままでまったく知らなかったのに、あそこにも地衣類、これも地衣類、公園の壁をみても地衣類だと夢中になる（笑）。苔を集めたり、キノコをコレクションしたり、そういう植物をすごく身近な存在として捉えられるようになる。そのように、子どもの気持ちに無理なく自然のイメージが入っていますよね。それは高学年の学びにとっての大きな支えだと思います。

学びを支える手仕事専科パワー

佐藤：教科間の横の連携はどうでしょうか。この優良事例のなかでもそれが活かされているところがありますか？

長井：3年生ならたくさんありますよね。

横山：ありますね。高学年の横の連携ってなんだろう。美術とかですかね。

長井：そうですね、光学をやった後にデッサンをやるとかね。頭で理解したものを今度は芸術的に取り組むわけです。芸術と知識とがどちらかに偏らないで、「こういう理論やったよね、だから光と影を意識したデッサンをしよう」とキャッチボールみたいになる。それから、心の支えをつくってくれているのは手仕事ですね。どの学年でも手仕事はその学年の学びをしっかり下支えしてくれているという感じはしますね。

佐藤：それはたぶん、一般の先生にとってはすごく新しいことですね。

長井：とっても新しいと思います。「家事ができるようになります」という技術家庭の学びではなくて、美しいものを自分の手で作り遂げる「手の仕事」です。今日の月例祭で8年生が素敵なオイリュトミードレス*を着て舞台上に立ちましたが、あれはつい一昨日縫い上がったばかりだったのです。8年生は11月に大きな劇（シェイクスピア『冬物語』全幕）をやり終えて、休む間もなく次は月例祭に向けてオイリュトミードレスづくりでした。男子も女子も放課後も

残って、一所懸命に縫ったんです。

ここでも手仕事専科との連携があって、たとえば7年生の世界史では大航海時代、8年生で産業革命を学びます。そのあたりからミシンという機械がだんだん考案されていくので、手仕事の先生たちは、その学びが終わるまでミシンを使うのをぐっとがまんします。オイリュトミードレスも世界史の話が終わってれば、ダーッと足踏みミシンで縫えるけれど、まだ終わっていないクラスは、一針、一針、縫うわけです（笑）。

手仕事では、自分が目的をもって使うもの、または誰かに使ってもらうものを、自分の手で美しく完成させることを大切にしています。自分の力で最後までやり通して完成させ、それを実際に使ったり身につけたりするのは、子どもたちの大きな力になると思います。

佐藤：それは学びを意志の力に転換するということでしょうか。

長井：本当にそうです。9年生はいま卒業制作でシャツをつくっています。自分の好きな色で、デザインも自分で考えて、型紙を先生と一緒につくる。早い子は脇の始末やカフスをつくるだけになっていますが、その前の課題だった靴下を編んでいる人たちもいて、彼らは追いつこうと必死で編んでいます。体の大きい男子などは毛糸をいっぱい使うので、しゃかりきになって編んでいる。それが終わらないとシャツまで行けないから、とにかく最後までやりますね。そのやり抜く力です。できたものをどうしてるのか、お母さんに聞くと、「はいてます、暖かいです」（笑）。

アクティブラーニングの本質

佐藤：福田さん、いかがですか、ここまでの話を聞いてご感想などあれば。

福田：ここは親の立場でコメントしたいのですが、

*オイリュトミー：シュタイナー教育で大切にされている身体芸術。言葉や音楽を構成する諸要素を身体の動きによって表現する。身体をゆったりと包むドレスを着て行う。



1年生から9年生まで、全員による美しいハーモニーが生まれる（2018年度2学期月例祭）

ひとりの先生が9年間担当すると初めて聞いたとき、それが何を意味するのか分からないところがありました。専門の先生、たとえば歴史専門の先生、理科専門の先生がいて、その専門の知識を伝授する方が学びになるのではないかと、そんな考えもありました。けれども、シュタイナーの教育に触れて1年、2年と経つと、今おっしゃったように、カリキュラムを通してこの世に先に生まれ出て生きている人の叡智を受け取るのだと分かってきました。

ぶつぶつ切り貼りされた表層的な知識を得るのではなく、そこから世界を感じとる感じ方を先生から受け取る。それをいろいろな確度、切り口、手法を使って、子どもたちが自ら体験する。まさにアクティブラーニングの本質なのかもしれません。日々の遊びや活動のすべてが、担任の先生を通じた世界とのやりとりになっているのだと思います。それが9年間で集大成される。

今日の月例祭を見ていて感じたのは、それぞれの学年のそれぞれの世界がしっかりとつくられるのだなあとということです。その世界を感じる事が、本当の深い学びの力を身につけるといことなんだろう。世の中に出ればいくらでも自分の力で学び取ることのできるのだから、そのための基本となる世界との触れ方を教えていただいているんだなという感じです。親としても、このカリキュラムは素晴らしいと思っています。

佐藤:そして、その、先生たちが伝えている世界観は、子どもたちにとってけっしてお仕着せにはなっていないですね。

福田:ええ、そう思います。

佐藤:子どもたち自身がとても内発的でアクティブになっているから、受け身にならないのでしょうか。先生の視点を消化して自分自身のものにつくり替えていく力が、常に働いているように思えます。

福田:子どもたちを見てみると、世界に広がっている何かをアクティブにつかみ取ろうとする、そんなパッションをどの学年からも感じます。教科などに区分されない神秘的なものを含めて、何かわからないものを知りたいという、ものすごく強いものを感じますね。

佐藤:本当にそうですね。今日はいいお話がたくさん聞けましたので、最後にSDGsに触れてこの座談会を締めくりたいと思います。

細分化される世界を統合するものは？

いま、ユネスコスクールやサステイナブルスクールには、SDGsを推進する役割が期待されています。SDGsには17の項目があげられていて、非常に細かく細分化されています。貧困や飢餓をなくしましょう、すべての人に健康をもらし福祉を促進しましょう、公平な質の高い教育をすべての人が享受できる

ようにしましょう、等々、17領域の社会的な課題があげられて、その下にさらに細かなターゲットが設定され、その課題解決の担い手になってくださいということです。

今日の座談会では、こういう細分化された社会課題のなかから「うちはこの項目をやります」というやり方は異なる取り組み方が示されたのではないのかと思いますが、いかがでしょうか。

福田:その通りだと思います。

佐藤:生徒たちの書いたあの詩を聞いただけで、「ああ、これだ」と思いました。

長井:そうですね。でも、だからといって彼らは素晴らしい子ちゃんではないし、遊びが大好きなどこにでもいる女子中学生、男子中学生ですけども。けれども内面の深いところで、物事の表面には見えないところに目を向ける大切さや、この世の中はすべてつながっているという感覚があって、彼らの人生のどこかでふと頭をもたげてきたり、知らないうちに自分の生きる力になっていたりするかもしれない。わたしにはその方が大事で、項目を一つずつチェックしながらというのは難しいなあと思います。

佐藤:子どもたちの姿を見ていると、そんな複雑化、細分化された社会課題を、オールラウンドに変えていく担い手になりそうな人たちですよ。

長井:はい。卒業生も含め、みんな前向きだしね。

福田:本当にそうですね。

長井:みんな本当に前向きで、元気で、自分の道をひるまず進もうとしている姿を見ると、横浜シュタイナー学園の学びはぜんぜん受験勉強には向かないですが、長持ちすると思います（笑）。

福田:持続可能な学びですね（笑）。ひとりひとりの子どもたちが、先生方から大切に扱われている、大切に支えられていることが、子どもたちの揺るぎない自信につながっていると思います。ひとりひとりが自分を本当に大事に思えば、隣の人も大事に思えるだろうし、自分が立っている大地とか、自分の周りの世界に対しても大切だと思う配慮が自然に生まれてくる。環境問題とか格差問題というように、すべてを問題に切り分けていくのではなく、我々の日々の生活と過去・現在・未来がひと続きになって生きている空間・時間すべてが大切に思えるのではないのでしょうか。

とくに低学年の学びは、畑仕事をしたり、家をつ

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



2030年までに達成を目指すSDGs(Sustainable Development Goals)の17の目標。各目標ごとに、さらに細分化された169のターゲットが設定されている。

くったりという素朴な学びのなかで、そんな大切なものをしっかり蓄えてきている3年間と感じています。3年でこれだから、9年だとその3倍ある。そう思うとわくわくします。

佐藤：お父さん、楽しみです（笑）。

福田：あとの6年、とても楽しみだと思うと同時に、何か親としても、子どもたちを支える親たちの集団として何かできることや役割など、気づいていきたいと思っています。

喜びを光として伝えたい

佐藤：そうですね。最後に両先生からひと言ずついただきたいのですが。

長井：ひとりひとりの教師が自分の得意分野を通して、それをもって9年間子どもと歩んでいこうというものをこのカリキュラムから引き出していく。このカリキュラムがあるからこそ、その人らしく組み立てられるんだとお話ししました。このことは今までに話したことがなかったですね。

横山：そうですね。

長井：その意味で、この時間は私にとって大きな収穫だったし、元気をもらいました。

横山：わたしはいま3年生の担任なので、長井先生のお話を聞きながらこれからのことを考えさせていただきました。そしてやはり、これは素晴らしいカリキュラムだなと思いました。それから、低学年の学びをどのようにつくるのかということは軽視されがちだと思いますが、このカリキュラムのなかには成長の途上にいる人間に向けられた眼差しの暖かさがあると思います。だから教師は学び続ける必要があるし、その学びから生まれる気づきを喜びに変



えて、その喜びを光として子どもたちに伝えていかなければと思いました。

佐藤：今日の座談会に立ち会ってくださった寺本さん、何か感想はありますか。

寺本：娘を学園に入れて2年目ですが、最近、4年生の娘が動物学を学んだので、ズーラシア動物園に連れて行ったんです。そしたら、あの勉強嫌いな娘がひとつひとつのブースに行って何が書いてあるのか真剣に読んでいます。「ああ、この動物はこれを食べるんだ」と真剣に学んでいるんです。「どうしたの？前はぜんぶ素通りだったのに」って聞いたら、「学校で動物学やってるから」と言う。教えられるんじゃなくて、自分でこれを学びたいという学びがあるんですね。これからの成長がすごく楽しみです。ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

第三部

卒業生の姿

第一部、第二部で見てきた暗示型 ESD で学び育った子どもたちは、卒業後、どのような道を歩んでいるのでしょうか。その実像をお伝えするために、プロの記者が学園に取材したルポルタージュ『自由への曳航』（田幡秀之著）より、学園生徒の卒業後の軌跡を辿る記事の一部を転載します。なお、文中の卒業生の氏名は仮名です。

卒業生の姿

『続ルポ シュタイナー学校の1年～自由への曳航～』より

勉強が面白い＝卒業生を訪ねる（上）

2017年3月、横浜シュタイナー学園から4期生5人が卒業した。学園の1期生の中には既に大学2年生になっている卒業生もいる。以前取材した時から4年が経つ。学園を巣立った子どもたちはその後、どんな道を歩んでいるのだろうか。春休みを使って卒業生を訪ねた。まずは、シュタイナー教育以外の世界に触れた3人だ。

子と母の葛藤

学園を15年3月に卒業した2期生の謙は現在、相模原市にある学校法人シュタイナー学園高等部の12年生だ。この続編執筆のきっかけを与えてくれた生徒だ。その謙が11年生の2学期の終わり頃、母親の範子さんに切り出した。

「冬期講習から予備校に通いたい」

「何を言ってるの。シュタイナー学校に通っているのに、どうして予備校なの」

範子さんは強い思いを持って、シュタイナー学校を選んだ。謙の通学時間は往復で3時間。12年生は卒業論文発表、身体芸術であるオリエントミー公演、12年生劇と大きなイベントが続く。受験勉強の時間を捻出するのは至難だ。謙が大学に行きたいのなら、浪人は覚悟していた。高校生活を全力疾走し、満喫してほしかった。それなのに受験対策の予備校。受験対策は将来のために貴重な今を犠牲にする。ショックだった。期待通りにならなかった、希望が覆された、と思った。お互いの気持ちをぶつけ合う、涙ながらの激しい親子げんかとなった。

謙は将来、新聞記者か国語の教師になりたいと思っている。いずれも

大学に進学する必要がある。高等部で敬愛していた国語の先生が病気で亡くなった。参考書を使って勉強していたが、限界を感じた。「もっと深く国語を勉強したい、誰かに教えてもらいたい」と思うようになった。予備校で志望校を告げると、「今すぐ受験対策を始めた方がいい」と勧められた。シュタイナー学校は総じて受験指導をしない。一方、予備校は、志望校に合格するため現実にやるべきことを目に見える形で示してくれた。

11年生の6月に航海実習があった。世界史で大航海時代を学んだ後、3日間をかけて帆船で駿河湾を一周した。球面幾何学の学習の総仕上げでもある。チームを組み、その日の天候や海図をにらみながら、航路を自分たちで決める。少しでも狂うと、目的地にはたどり着けない。

範子さんは考え抜いた末、こう思うようになった。

「実習から帰ってきた頃から、謙は世の中に出て行こうとする力が育っていたような気がします。謙は将来の夢、そのための大学、と先をよく考えていました。受験テクニックを身に付けないと、この子



学校法人シュタイナー学園の公開実習＝同校提供

がやりたいことには届かない、と現実を知りました。頭が吸収しがっている、知的に伸びたいと思っている謙を、シュタイナー教育ではなくてもいいから満たしてあげたい」

勉強する癖

謙は予備校に通い始めてすぐ、英語の模擬試験を受けた。結果を見た予備校の先生に、叱責された。

「たまたま正解を選んだだけだ。このままの勉強方法ではだめだ。いつかつまずく。もう1回、高校1年生の英文法から固め直せ」

謙は長文読解やリスニングで高得点を取る。一方で、文法問題は苦手だ。長文読解やリスニングの点数が低い、他の高校生とは逆だった。それが予備校の先生には理解できない。「文法が分からないのに、長文読解ができるはずがない」と。シュタイナー教育で行われる英語の授業は、日本語を介さないダイレクト・メソッドが中心。耳から英語になじんでいく。細かい文法よりも、長文の大意をつかむことを重視する。

「あそこまで人に強く否定されたのは初めてかもしれませんが」と言いながら、謙は全くめげていない。志望校に合格するためには英文法の勉強も必要だからだ。ほぼ毎日、午後10時まで予備校で勉強している。否定されても、面白いことを言われたかのように、いたずらっぽくこう続けた。

「僕は口ではいつも、やばい、やばいと言っているタイプですが、実際には何とかなる、やればできんじゃない、と思っています」

「何とかなる」。横浜シュタイナー学園2期生の生徒たちがよく口にする言葉だ。保護者たちが「その自信はどこから来るのか」と頭をひねる自己肯定感の高さ。

「神田先生の気質じゃないですか。あの人、自信あるから」

神田先生とは、学園で2期生の謙たちを9年間担任した神田昌実先生だ。謙たちを卒業させた後は振

り出しの1年生に戻り、今は2周目の3年生を教えている。神田先生は謙たちを「私の自慢の子どもたち」と言い続けてきた。

「シュタイナー学校に通ったから、将来やりたいことを今、見付けられたんだと思います。とにかく神田先生の授業はめっちゃめっちゃ面白かったですね。神田先生は教えないんですよ。さあ、考えてみよう。僕は数学はできないけど、好きでした。日本史は、あの人、ちょっと雑だったけど。先生には勉強する癖、考える癖をつけてもらいました」

謙は「勉強が趣味」と言ってはばからない。受験勉強は楽しい。知るのが楽しい。でも、高等部の卒業論文もしっかりやりたいと思っている。横浜シュタイナー学園9年生の時に経験した卒業プロジェクトの快感が忘れられないという。高等部の同級生らとウェブサイトを立て、そこに記事も書き始めた。範子さんは今、夜遅く帰る謙のために毎日おにぎりを作っている。

郷土学と地図と自転車

“I got a very unique education from one of Steiner Schools for over 9 years. (シュタイナー学校はとてもユニークな学校で、僕は9年間そこで学びました)”

学園3期生の高助が今年1月、全国商業高校英語スピーチコンテストの全国大会で披露した内容の一節だ。高助は学園の授業を紹介した。学園には教科書がない。自分たちで作るエポックノートが教科書になる。高助の担任だった横山義宏先生も答えをすぐには教えなかった。普通の学校では「3足す7は？」と問うところを、「10になる数式は何がある？」と尋ねる。答えは無限にある。学園の授業は受け身ではいられない。そして問題に対する様々な解決法を創造する力を身に付けるのだという。

独学でピアノを習得した。学園の卒業プロジェクトでは情感豊かにショパンのノクターンを披露し、聴衆を泣かせた。だが、高助はシュタイナー学校の高等部も音楽の道も選択しなかった。



自転車競技部の練習=高助君提供

ないこともあったが、今はすっかり順応し、大会で結果を残せるよう猛練習が続いている。

ツール・ド・フランス

夢に向かって充実した部活生活を送っている高助だが、高校の授業はつまらないと思っている。

「シュタイナー教育を受けてきた人からすれば、ほとんどの授業が面白みを感じられないでしょう。差をあまり感じないのは数学くらいで、あとの教科は学園で9年間受けてきた教育と違います」

何が違うのか。

「高校の授業では、先生が教科書の内容をただ読んで、生徒に聞かせています。それなら、教科書だけで勉強できます。先生が教えることは全て教科書に載っていますから。学園の授業は、自然に自分から積極的に参加していくようになっていました。黒板に先生が書いたことを全てエポックノートに書き留めます。本来なら、みんな同じものが完成するはずなのに、見比べてみるとそれぞれの個性が出た違うものとなっていました。研究課題なども全員が真剣に取り組み、レポート作成から発表まで全力を注ぎます。勉強とはただ席に座って、教科書を眺めながら先生の話を聞くというような、積極性に欠けるものではないと思っていました。でも、やはり一番の違いは、先生と生徒の勉強に対する価値観でしょうか」

高校では定期考査などテストが頻繁にある。生徒たちはほとんどテストとその評定、進級のために勉強しているという。それに対して、学園にはテストがない。数値でランク付けする評定もない。人と比べるのではなく、自分がどれだけ成長したかが重要と考えられているからだ。ただ、高助は現状に疑問を抱きつつ、テストには全力で取り組んでいる。昨

小学校3、4年生の頃から地図が好きだった。学園ではちょうど、郷土学や地理学を学んでいた。地図に魅了されたのはごく自然なことだった。地図を眺めながら、ここに行ってみたい、この海を見てみたいと思う気持ちが、高助と自転車を結びつけ、世界を広げた。

「自分自身の力でどこへでも行ける気になれる、遠い先の山を見ながらじかに風を受けて、ひたすらペダルを回し続けながら。そこには特別な楽しさがあります」

5年生の時に学園の友達と江ノ島まで遠出した。8年生の頃、「ヨーロッパで自転車選手として活躍したい」と将来の目標ができた。高校からは本格的に自転車競技を始めようと決めた。祖父母が住む熊本市には強豪自転車競技部を擁する公立高校があった。カリキュラムには学園で9年間学んだ中国語があった。海外留学制度も充実していた。

高校では授業が終わるとすぐに、自転車用のウェアに着替え、トラック競技のためのバンク練習か公道でのロード練習に出掛ける。練習が終わるのは午後7時過ぎ。最近は帰宅後に1時間の自主練を欠かさない。初めのうちは体育会系のあいさつなど慣れ

The Goal of Education

Have you ever heard of Steiner School? I'm sure most of you haven't. Well, the school's origin is from Germany, and there are seven schools in Japan now. And I got a very unique education from one of them for over nine years. Today, I'll tell you what I learned at the school and what makes it unique. I'll give three examples of the uniqueness of their education.

First of all, at Steiner School we had no textbooks. Can you imagine? How did I learn? Let me tell you. We wrote and wrote. We had to write down every day what we learned from our teachers in our own white notebooks called "epoch note". It was really hard work, but we always took easily readable notes by using a variety of color pencils and fountain pens.

Secondly, the teachers didn't give us the answer right away if we faced a problem. They let us to consider how to solve and how to lead ourselves to the answer. For example, in mathematics, most of the teachers who are in normal public school ask the students, "How much is three plus seven?" Of course the only answer is ten. It's simple. However in this education, teachers ask "What equations have the answer ten?" By asking so, the answers will be infinite!

Thirdly, the teachers don't encourage using the internet or television. They often said to us, "Don't believe all information and what newscasters say on TV". They taught us not to depend on the internet, but to go to the library and search for answers.

Do you understand how unique Steiner School is? Very different, right? While I was at Steiner School I figured out that by choosing the hard way, we won't be passive, we won't be bound by only one thing, and we would find many answers and create many ways all by ourselves. I learned it from this unique education of taking the epoch notes, by thinking about equations, and by not using the internet.

I'm sure that the goal of education is to think about various things with our own brains. Finding a lot of ways leads to opening our minds. Never to choose easy ways when you decide something. Never to believe everything in the media without thinking deeply. Why don't we stop and take time to search for infinite possibilities by making an effort, on our own?

高助君のスピーチ原稿

年度の成績は学年1位だった。

「卒業後の進路についてはまだ漠然としています。正直、2年生での自転車の成績の伸び次第です。2年生で全国トップレベルまでになれば、卒業後ヨーロッパのチームに所属するか、自転車留学をしたいと考えています。なので英語はもちろん、フランス語を勉強しようと思っています。もし、そこまで強くなれなかった場合は自転車競技部のある大学に進学し、そこでまた全国を目指したいです」

母親の文さんは言う。

「親としては、やりたいことをやりなさいと一貫しています。ただ、経済的には大変です。学生の間は支援しますが、それ以降は自分でお金を稼ぎながら、好きなことを続けられればいいと思っています」

高助が目指しているのは、世界最高峰のロードレース、ツール・ド・フランスだ。毎年7月にフランスと近隣国を舞台に3週間をかけて3000キロ以上の道のりを走る。

「レースにはそれ以上に過酷な駆け引きや自然との闘いがある。たった一人のエースを勝たせるためにチームのアシストたちは献身的な走りをする。だからエースは重いプレッシャーを感じながら、ひたすらゴールを目指す。他のスポーツには無い、非常に複雑で過酷な要素があると思うのです」

高助はスピーチをこう締めくくった。

“I'm sure that the goal of education is to think about various things with our own brains. Finding a lot of ways leads to opening mind. (教育の目標は、自分の頭で考えられるようにすることだと思います。さまざまな道を探すことは、私たちの心、物事に対する考え方を開くことにもつながるのです)”

高助は学園で培った考える力とオープンマインドで、夢を追い掛けている。

全科目を勉強したい

学園で謙の同級生だった輝を訪ねた。輝は神奈川県内の総合学科のある公立高校に進学した。普通科

目のほか、芸術、情報、工学など選択科目の中から、将来の進路を考えて科目を選択できるのが特色の学校だ。学費や通学距離を考えて選んだ。生徒会に加え、全国レベルの美術部にも所属している。5段階評定は、1年次に平均で4.8点、2年次は4.5点。高助同様、学業成績は優秀だ。輝も「勉強が好きだ」という。

「シュタイナー教育を受けたからというのではなく、スポーツ、音楽が好きというのと同じだと思います。ただ、スポーツなどは部活やクラブチームで自主的に参加するものですが、勉強はやらなければいけないものという感じが強い。やらされてる感が強いと勉強が好きなのも嫌いになってしまう。あれ？勉強、学ぶことが好きという感覚がここまで続いているのはシュタイナー教育のお陰なのかな。神田先生には勉強する癖を付けてもらい、感謝しています」
勉強の何がそれほど楽しいのだろうか。

「例えば世界史」と言って、輝が語り始めたのは、紀元前1500年頃の出エジプトだ。学園では旧約聖書を読み聞かせる時間の中で、神田先生はこう話した。

モーゼが、奴隷として使われていた人たちを連れて、エジプトを脱出し、約束の地カナンを目指した。エジプトの王様は、彼らを引き戻そうと軍隊を差し向けるが、モーゼが手を上げると海が割れ、道ができた。モーゼたちが渡りきったところで海は元に戻り、追いかけてきたエジプト人はおぼれて死んだ。

「その話を聞いた時は、昔話、作り話と思っていたのですが、出エジプトは高校の教科書にも載っている。事実だったと知った。(学園同級生の)春も卒プロで話していましたが、さらに、そこから聖地を奪回しようとする現在のイスラム国(IS)にもつながった。旧約聖書は、海を割ったなど現実的でない話も混ざっているけど、教科書を読めば読むほど、歴史を踏襲していることが分かって面白い。神田先生の話した神話的歴史と教科書に書いてある考古学的歴史の2種類の歴史が自分の中で一致したときは腑に落ちました」

輝も高校の授業はつまらないと思っている。だが、



学園の保護者向け研修会で卒業生が語る

教科書は面白い。エッセンスが凝縮されていて、幅も広いと思う。授業中は先生の話を見ずに、教科書を読んでいることが多い。

シュタイナー学校には教科書がない。教師の話聞き、自分たちで調べ、考え、つくりあげるエポックノートが教科書になる。だから、授業が面白いのだという。

「学園の先生は教科書をつくることから始めなければならない。しかも、国語、数学、理科、社会の4教科。それはすごい知識の量が必要になる。雑学は勉強の第一歩。生徒が能動的に取り組むのに、面白い知識をいかに生徒に見せるかは大事。普通に話していても広い知識を持っている人と話している方が楽しいですね」

輝は来年、大学を受験するつもりだ。

「本当は理系も文系も全部の科目を勉強したいんです。でも、それは大学の4年間では無理だから、包括的に全ての学問の意味付けをしている哲学を学びたいんです」

小中学校の9年間は人間形成に大きな影響を及ぼす。謙と輝の担任だった神田先生はこう考えている。

「自己教育できる人になってもらうのが教育の最終目的だと思っています。人生は学校を卒業してから本当の勉強が始まる。学ぶ喜びを、学校生活全体を通して生徒たちに身体で覚えてもらうことが重要です。喜びはすべての不可能を可能にする力を持っていますから」

卒業生の姿

『続ルポ シュタイナー学校の1年～自由への曳航～』より

ルート・ファインディング＝卒業生を訪ねる（下）

「とりあえず大学に行く、という選択肢はありません」

大学への入学定員総数が入学希望者総数を上回る大学全入時代。大学進学率は5割を超える。ブランド、4年間のモラトリアム、就職に有利な学歴とその後の安定…。今回訪ねた横浜シュタイナー学園の卒業生3人には、全く興味がない。

自分が助ける

「高校の友達に、バレエを習っていると話すと、やっぱりねと言われます。授業の3分間スピーチで、東京消防庁のレスキュー隊について熱弁したら、意外すぎてびっくり、と驚かれました」

バレエで鍛えた身体。その優雅に踊る姿に憧れ、学園下級生の女の子たちが何人もバレエを習い始めた。繊細な水彩画は人の心を和ませる。そんな真奈美が思い定めた将来は、災害救助犬訓練士だ。被災地で救助犬とともに被災者を救出する仕事だ。春からはそのための専門学校に通う。

学園1期生の真奈美は都内の私立高校に進学。高校3年間の総合成績は5点満点中4.7点。オール5に近い。当然、高校の先生たちは大学進学を強く勧めた。推薦で相当なレベルの大学への進学も可能だった。真奈美は「大学でやりたいこともないのに、不登校になりそう」と、一切を断った。学園9年生の時には、バレエの先生に才能を認められ、ロシアへのバレエ留学を勧められたが、それも断った。それほど、真奈美のレスキューへの思いは強い。

小さい頃から消防など人命救助の仕事で「カッコいい」と思っていた。消防の出初め式には必ず出掛けた。6年生の3月11日に東日本大震災があった。よく読むレスキューの雑誌に救助犬の活躍が多く載っていた。動物は小さい頃から好きだ。自分の体

力を考えると、レスキュー隊に入るの難しいかもしれないが、救助犬訓練士としてなら、道があると思った。

高校の友人とこんな話をしたことがある。

友人「困っている人がいても、誰か助けてくれる人が必ずいるじゃん」

真奈美「でも、皆がそう思っていたら結局誰も助けない。そうしたら自分が助けるしかない」

高校2年の5月に、学校の体育館で火事があった。過熱した床置き照明器具がカーテンと接触し、火柱になった。集まっていた生徒たちは皆騒いでいるだけで、何もしなかった。「やはり自分が動くしかない」。傍観者にはなりたくない。それとともに、駆け付けた消防車が、真奈美に強い印象を残した。

「来ただけで安心感を与えるんですよ。すごい」

クラスメートはほとんどが大学に進学する。4校受けて不合格、5校目は合格したが、そこには行きたくないというクラスメートがいた。世間で言う滑り止めを知らない訳ではないが、理解に苦しむ。本当は専門学校に行きたかったのに、家族全員高学歴の中で自分だけ大学に行かないことは許されないという友人もいた。

自由を勝ち取る

「ヒントはエポックノートにあると思うんです」

真奈美はこんな話をしてくれた。

「高校の体育祭では、各クラスがTシャツを作るのですが、ナイキやアディダスのロゴを少し変えるだけで何かの真似。いつもクラス内で著作権（意匠権）侵害という言葉が出てくる。高校の授業では、教科書があって、先生が黒板に書いたことを写すだけ。絵とかもないし、すごい殺風景。普通の学校ではそれを見て覚えるから真似になる。学園では自分でエ



発表会ではソロを踊った＝真奈美さん提供

ポックノートを作って、それが教科書になっていました。同じ授業を受けているのに一人ひとり違うノートができます」

一般の学校は、国家や社会が要請する人材を育成することが求められる。そのため、子どもをどう社会に合わせるかに重点が置かれる。シュタイナー教育は「自由への教育」と言われる。自分で考え、自分なりの人生の使命をつかみ行動する、自由を持った大人になれるように育てる。「皆が大学に行くから、私も」と周りに左右されることのない真奈美は、既に自由を勝ち取っているのかもしれない。

真奈美は行きたくもない大学で4年間を過ごすのは「無駄な時間だ」という。

「大学はブランドだけが全てのような気がして。有名な大学に入っても実力は人それぞれ。就職には有利かもしれないけど、きっとその後が大変ですよ。それよりも実力を付けたい。中途半端は嫌。その間に徹底的にやりたいことを極めたいです」

真奈美は救助犬訓練士の国際資格取得を目指している。ただ、まだ18歳。一つのことに絞らず、まだまだ可能性を探ってもいい年齢だ。

「(シュタイナー教育独特の身体芸術である)オイリュトミーでは、周りの空気を感じながら動きます。人とぶつかってはいけない。目で見なくても誰がどこにいるか感じる。だから、後ろを見ずに下がっても大丈夫。シュタイナー学校の生徒はそういう感覚

を身に付けるんです。目で見て確認しながらではなく、感覚で生きる。私にとって災害救助犬訓練士は、そういう感覚で選んだ道です。

華やかできれいなものが好きなので、結婚式場の仕事を知ったときはいいなと思いました。でも、その仕事に就きたいとは思わない。学園のフォルメンの授業で描いた8の字と一緒に。授業中、蜜ろうクレヨンですっと同じところをなぞり続けるんです。遠回りや寄り道をすることもあるけど、大きく外れることはない。その線の上を歩き続ける。それが私の人生です」

型にはまらない

相模原市藤野地区。見渡す山並みにまだ雪が残る17年3月末、博明がコンテナを改装して製作したカフェで、博明と浩兵に話を聞いた。

2人は真奈美と同じ学園時代からのクラスメート。学園卒業後は、同市にある学校法人シュタイナー学園高等部に進み、計12年間をともに過ごした。カフェは博明が卒業プロジェクトとして取り組み、浩兵が手伝った。「お久しぶりです」と元気に迎えてくれたこの2人。真奈美と違い、高校卒業後の身の振り方が決まっていない。2人の母親はやきもきしているが、博明と浩兵に焦りはないどころか、「これから起こることにわくわくしてます」と、全く屈託がないのだ。

2人とも、大学進学を勧められ、博明は建築、浩兵は比較芸術の学部がある大学のオープンキャンパスにも行ってみた。浩兵は一応受験したのだが、志望動機に大学教育への批判を書いて不合格。

「書きたい放題書いたらすっきりしました。現時点で何をやりたいか分からないから、選びようがないんです」

博明はAO入試を受けられる内申点は満たしていたが、合格しても行かないだろう、と受験料で家族と寿司を食べに行った。

真奈美のように、高校卒業時点で明確な将来像を



卒業制作のコンテナカフェ

持っている人はそう多くない。取りあえず大学に進学し、そこで将来を考えるのも一つの手だが、博明はそうは考えない。

「僕はカフェをつくるときにラフスケッチだけで、設計図を書かなかったんです。最近の建築は分業化されています。製材所で寸法に合わせてカットされた木材を、現場で組み立てるだけ。寸法が間違っていたとき、カンナをかけて木材の厚さを調節することができない大工さんが増えていいます。それって面白いのかなと思う。最初から型を決めなくて、やっていくうちに見えてくるものがある。それと同じで、大学進学という目標を立ててしまうと、もっと大きな可能性を見落とすのではないかと、もったいない気がして仕方ないですよ。型にはまらなくて自分らしく生きたいですね」

シュタイナー学校自体、日本の公教育の型にはまっていない。そんな教育が影響しているのだろうか。博明が振り返って話してくれた。

「横浜シュタイナー学園の木彫の授業では、最初に何をしようかと決めずに、小刀で木を削っていきます。削っていくと流れが見えてくる。流れに沿うことが大事だ、と（担任だった）長井（麻美）先生が言っていました。そんなことも今につながっているのかな」

12年間をともにした2人は、お互い影響し合った。浩兵は、小学3年生から習っているチェロの先生に

「豪腕」と称される腕前だ。卒業プロジェクトの題材に、バロック後期の作曲家ヴィヴァルディを選んだ。

「ヴェートーヴェンのようにしっかり構築されている組織的な音楽ではなくて、ヴィヴァルディは原譜を見ても即興的な要素が強いんです。音楽で鳥の鳴き声を表現したり、遊び心がある。卒プロではなぜ自分がそこに引かれるのか、音楽を通して自分の生き方を探ったのですが、型にはまりたくない、個性を出して自分らしく生きたいという部分に重なりました」

彼らはもともとこう考えていたのではない。話をしているうちに思い出したことがある。横浜シュタイナー学園は高等部を併設しておらず、近隣でシュタイナー教育を受け続けるには、2人が通った相模原市の学校法人シュタイナー学園か、NPO法人が運営する東京賢治シュタイナー学校（東京都立川市）のどちらかを選ぶことになる。

学びの本質を知る

浩兵は「学校法人で大学に入りやすい、という今とは全く違う視点で高校を選びました。高校では受験勉強しなきゃという思考回路が働いていました」。博明も「今何をしたいか分からず大学に行く人と同じで、安定を求めた。学校法人だし、高認（高校卒業等認定試験）を受けなくていい、というのが大きかったです」

それが、どこで、何をきっかけに変わったのだろうか。

浩兵は言う。

「シュタイナー学校は歌ばかり歌っているし、こんなことをしていて大丈夫かな、と中学の頃までは思うこともありました。でも、例えば高等部の歴史の授業では、何故そうなったのかを当時の人に成り切ってディベートするんです。年号や制度の名称だけ知っていても、中身、背景が分かっていないと意味がない。そういう授業スタイルを通して、暗記中心の受験勉強が何のためになるのか、と疑問を持ち、

学ぶことの本質は何かに気付き始めた。勉強するのは大学に入るためではなく、自分のため。だから、そこを突き詰めていけばいいと思うようになってきた。（学園の）長井先生もそういう授業をしていましたが、高等部に来て必要な学びだった、とじわじわと分かってきました」

進学校であれば、高校2年生までに3年間の全てのカリキュラムを終え、3年生は受験対策一色になる。それに対してシュタイナー学校は3年生も重要行事が目白押しで、最も忙しい学年だ。これと言った受験指導もしない。博明の母親の敬子さんは望んで、我が子をシュタイナー学校に入れた。12年間には満足している。それでも、いざ我が子の進路となると、帳尻を合わせたい、と一般的な期待が頭をもたげてくる。

「自分の経験からすると、普通の親としては最後は、大学に行って、就職してほしいです」

浩兵の母親の佐知子さんも同じ考えだ。そう考えるのは2人だけではないだろう。

「親がシュタイナー教育を勧めて入れたのに、今度は手のひらを返したように大学受験しろ、というのも面白いですね」と浩兵。

皮肉ではない。むしろ親には感謝しているのだ。

「折角、今までシュタイナー学校で面白い学びをしてきたのに、12年生になって一気に冷めて、受験勉強を始めてしまうのを見ると、もったいないと感じます。ここで一般の大学の学びに移るより、今までの学びを熟成させた方がいい」

「ほんと、もったいないよね」と博明が続ける。

「大学に行くのが当たり前になっているから、他の選択肢が見えなくなっちゃう。僕たちは他の選択肢の方に引かれただけ。オイリュトミーをもう2度としないのはもったいないですよ。僕は、自分の子どもはシュタイナー学校に入れると思います」

ギャップ・イヤー

博明は11年生の秋から、平日は毎日午後8時頃ま



コンテナカフェの内部

で、休日も休みなしで、卒業プロジェクトのカフェづくりに没頭した。コンテナの壁と床に板を貼り、カウンターを作った。通学に片道2時間半かかるため、学校近くのクラスメートの家を泊まり歩いた。その縁で、博明は4月から京都市に行くことになった。泊まった先の父親が京都でカフェを経営しており、その改装を手伝うことになった。

「建築家になりたいのか、大工になりたいのか。家具や木製小物作りにも興味があるし。自分でデザインして、施工も自分でできたら楽しいだろうな。木に携わっていたいというのは確かな。半年、1年後には北欧に行きたいです。欧州の建築物は石造りが中心ですが、北欧は木を使っていますから。京都市行きはそのためのお金稼ぎの意味もあります」

博明は木が好きだ。木の匂いが好き、質感が好き。小さい頃から木に触っていた。父親とよく、山小屋に泊まった。その空気が好き。旅も好きだ。中学3年生の夏に単身、自転車で軽井沢から日本海に出た。高等部では横浜市の自宅から軽井沢まで自転車で行き、日本列島を横断した。

「北欧から帰ってきたら、目標は変わっているかもしれませんが。北欧の空港に降り立って、その先は着いてから走りながら考えます。行けば何とかなる。ただ、楽はしたくないですね」

「将来は白紙です」と言う浩兵も旅に出る。4月中旬から1週間、スイス・バーゼル近郊のドルナッ

ハで開かれるシュタイナー教育関係の合宿に参加する。16～19歳の同世代の学生たちと交流するのだという。

海外に行けば何とかなる、と無闇に思っているのではない。浩兵にはきっかけとなる実体験がある。15年春、相模原市のシュタイナー学園でアジアのシュタイナー学校の教師らが教育の成果や課題を話し合う、アジア・ヴァルドルフ教員会議が開かれた。10カ国・地域の400人強が集まった。その時、浩兵は生徒向け広報誌の編集委員になった。外国人教師に取材しなければならない。当時、英語が苦手だった浩兵には「悪夢だった」という。それが、単語を並べるだけで意外と話せた。楽しかった。語学、異文化交流に興味湧いてきた。苦手だった英語は好きな科目になった。今はドイツ語も独学で勉強中だ。

「海外の人とコミュニケーションをしたくてしょうがないんです。視野を広げたいんです。スイスでの国際交流の中で何か見えてくるかもしれない。英語がうまく通じなければ、語学の勉強という方向に進むかもしれない。何も得られないかもしれない。スウェーデンのヤーナにシュタイナー教育に基づくワークショップなどを行っている10カ月のプログラムがあるので、13年生として今まで学んできたことをもう少し深めてみることに興味があります」

ワンダリング・アラウンド。歩き回って考える。日本では数年前に頓挫したが、欧米では定着しているギャップ・イヤーを、日本の高校を卒業した2人が実践しようとしているようにも見える。

自分探しの冒険

博明は自転車、浩兵はロック・クライミングが趣味だ。それもかなり本格的だ。浩兵は50メートル級

の一枚岩を登る。浩兵は「自然の中にいるのが好きなんです」。博明は「自然は欠かせないよね」。そんな2人はこれからの旅を、共通の趣味スキーになぞらえた。

浩兵「ゲレンデスキーは整備されていて、開放感があって楽しいんですけど、斜面の木を伐採して整備するから環境破壊の一面がある。それに比べてクロス・カントリーは山を一つ開放しただけ。木を切らないし、岩も露出しているところを滑ります」

博明「リフトがないから登る行程もある。足にかかる負荷も大きいし、楽ではない。道に迷うかもしれない。危険もある。死ぬかもしれない。でも、そっちの方に引かれるんです。自転車で旅をするのだから、行ったことがない世界を知るため」

浩兵「僕らにとって、ロック・クライミングも自転車もスポーツではないんです。それが目標ではなく、知らないところを見に行くための手段、ルート・ファインディングなんです」

ルート・ファインディング。登頂・登攀などの道筋をさぐることだ。自分の知識や感覚、地図やコンパスなどの情報を元に最適なコースを見付ける。極限状態で、冷静な判断が求められる。

博明「うんうん。だから生半可な気持ちではやりたくないっすね。何がしたいかを探すために海外に出がち。そうではなく、何をしたいか探していること自体が超楽しい。わくわくしちゃうよね」

浩兵「冒険みたいな感じ」

R・シュタイナーは第一次世界大戦後、生きる目的を見失っている若者が多いのは教育に原因があると考え、シュタイナー教育を創設したという。100年後の今、シュタイナー教育で学んだ日本の生徒たちは、生に満ちている。



第三部は、横浜シュタイナー学園が刊行したルポルタージュから著者の許可を得て転載しました。転載した卒業生以外へのインタビューを含め、横浜シュタイナー学園のアクティブラーニング、道徳教育、演劇教育、農業実習、ITC教育、グローバルシチズンシップ教育、卒業プロジェクトなどが取材されています。(入手情報はP.69をご覧ください。)

第四部

資料編

資料1 『キラリ！発進 サステイナブルスクール』掲載記事	62
資料2 『世界大会記念 ユネスコスクール ESD 優良実践事例集』掲載記事	64
資料3 横浜シュタイナー学園カリキュラム 2018年度版	66
資料4 ユネスコスクール神奈川宣言	68
資料5 参照資料情報	69

特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園

お話と芸術に充たされた、子どもたちの本質に応える学び

KEYWORD

その他（暗示的な機関包括型アプローチによるオールラウンド ESD）

これまでの活動

ねらい (GOAL)

ESD のテーマとして自己変容が挙げられるように、持続可能な社会を実現するためには教育自体が変わることが必要です。日々成長し続ける子どもたちを健康に育むためには、教育もまた命をもち、成長し続ける営みでありたいと思います。私たちの ESD のゴールは、この生きたプロセスに宿る教育

のダイナミズムを大切に、学校の発展の段階ごとにやってくる課題を見誤らないように努め、それらの課題に適切に応えながら、成長発展する生きた教育をつくり続けていくことにあります。

活動内容 (ACTIVITY)

私たちはこれまで、横浜の地に、教育内容、運営スタイル、立ち上げ方、法的な位置づけ等々、すべてにおいて新しい学びの場をつくりあげること力を注いできました。教育面では、学年ごとの成長発達の質的な変化への洞察に基づいた国際ヴァルドルフカリキュラムを日本文化にあわせて再編成し、学期ごとに教科間の連携をとりながら、縦軸（発達段階間の相関性）と横軸（教科間の相関性）の両面にわたる有機的な全体性を備えた ESD を実現してきました。あわせて教授法においても、イメージ豊かなお話を用い、絵画、詩、歌、身体活動など、五感を動かせる芸術的な取り組みを授業全体に浸透させてきました。これらの取り組みは、ESD の重要な要素である「統合」と関わりをもっています。人という存在を統合するものは自我です。しかし子どもの自我はまだ柔らかく未熟な段階にあり、自己と世界を力強く統合していけるようになるためには、自我がその子の人格の隅々にまでしっかり根を張るところまで待つ必要があります。

その間、私たち教育者は、世界を、あらかじめ統合され、調和のとれたまとまりとして子どもたちに提供する助力者として立ちます。このような子どもの本質に応える手法が、物語や芸術を用いたアプローチということなのです。2015 年、国連によって SDGs が採択されました。この持続可能性の「ゴール」は 17 の分野に細分化されています。そこに至るためには段階が必要です。子どもたちの成長の段階を見極めながら適切な時期に適切な課題を取り上げ、子どもたちの自我が世界の網の目のような諸事象に「わたしごと」として結びついていけるよう、できるだけ豊かなイメージや心と感性を用いる芸術的な活動を整えること。そのような学びが、この世界における真理、秩序、倫理のもつ美しさに共感する感受性を整えます。このようにして、細分化された SDGs に自由な意思によって結びつき、それらを力強く統合していける人格を育むことが、暗示的な機関包括型アプローチの真髄なのです。

変容 (TRANSFORMATION)

いま、毎年送り出す卒業生の姿を前にして、そこから静かな波のように伝わってくる彼らの ESD マインドに、教職員も保護者もただ圧倒されています。その飾り気なく真っ直ぐな立ち姿は、彼らがこれから社会のなかで選択していくもの、

生み出していくもの、働きかけていくものが、世界の持続可能性増大に向けて方向付けられていることへの確信を抱かせるに十分です。

ユネスコ・アジア文化センター 2017 年発行
『キラリ発進！サステナブルスクール
～ホールスクールアプローチで描く未来の学校～』より

サステナブルスクール事業年次報告書として刊行された冊子に掲載した報告記事です。「活動内容 (ACTIVITY)」の項は、本報告書の第一部、第二部の解題としてお読みいただけます。



これからの活動

重点校事業の課題として私たちは、この教育の ESD 要素を整理して言語化、ビジュアル化し、社会に共有可能な材料として出版物などにまとめる目標を立てました。そのために、これまでの教育活動を継続発展させながらフィールドワーク等の課題活動を並行して実施していきます。また、重点校と

あわせて参加権をいただいた「地球規模の気候変動への機関包括型アプローチ」プロジェクトの視点からの取り組みをそこに加え、後者の取り組みについての良質な資料にもなるようなものに仕上げたいと考えています。お楽しみに！

審査時の注目ポイント

横浜シュタイナー学園は、国際ヴァルドルフカリキュラムを適用し、異なる発達段階間の相関性と教科間の相関性を組み合わせた有機的な全体性を備えた ESD のモデルを作り上げられています。これは「統合」のモデルとなるでしょう。芸術や音楽、演劇、身体表現などの芸術的な創造力や表現力にも着目したいです。生徒の優れた資質や変容がどうして起こるのかを探求して、その成果をぜひ全国のみなさんに示してください。(市瀬先生)

学校情報

学校名	特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園	TEL	(045) 922-3107
児童・生徒数	110 名	FAX	(045) 922-3107
住所	〒226-0016 神奈川県横浜市緑区霧が丘 3-1-20	E-MAIL	jimu@yokohama-steiner.jp
		HP	https://yokohama-steiner.jp/

神奈川県
横浜シュタイナー学園

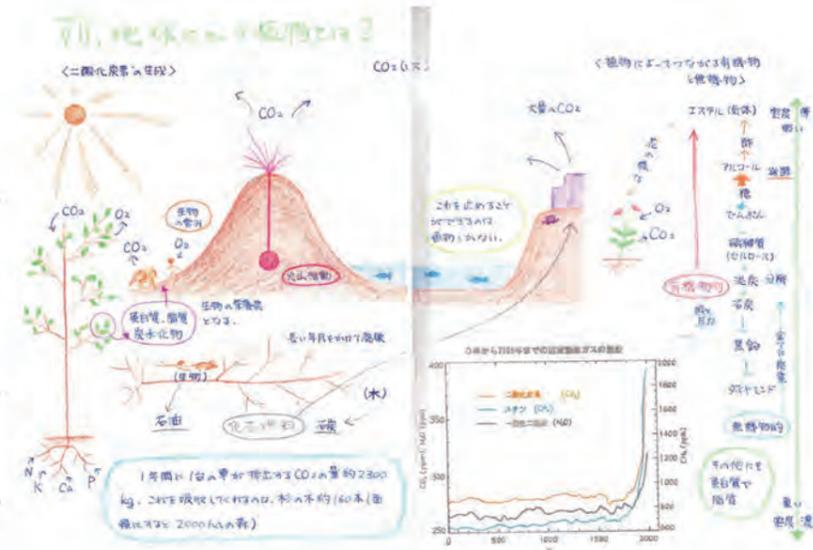
化学・農業実習を通して地球環境を学ぶ

環境

【キーワード】

燃焼と植物 植物が生み出す三大栄養素 地球上を循環する人間・動物・植物の共生 植物は地球上に酸素をもたらす

水・酸素・二酸化炭素 唯一の存在



▶ Goal ねらい

□ → □

ごく身近な植物の存在を、化学と農業実習や自然農講義を通してより深く理解したうえで、地球環境の保全の重要性に実感を持ち、自分自身の生活に役立てる気持ちを育む。

植物や動物

自然界の全てのものが

お互いを支え合いながら生きている

何か欠けることが壊れてしまう

この完璧な世界の設計図を

描いたのは誰だろうか

なぜバランスが崩れたその世界に

人間を加えたのだろうか

自分が創り上げた美しい世界を

壊してはく存在を知りながら

しかし、信じたので

地を従えるという責任を与えて

▶ Activity 実践内容

□ → □

■ 7年生(中学1年生)

観察することを通して、根・茎・葉・花の質の違いに着目する。植物の体を作っている自然界の要素との関連を考える。

■ 8年生(中学2年生)

酸とアルカリ(塩基)の学習を通して、水の性質や役割を理解し、水が地球上を循環することを再認識する。

■ 9年生(中学3年生)

農業実習と自然農講義によって、植物(農作物)と人間、動物、地球環境との深いかわりを知る。また、有機化学の学習を通して、生物が生きるために必要な三大栄養素は、すべて植物から生み出されることに着目する。そして、植物が栄養素を生み出す光合成の過程で、酸素がもたらされることを理解する。



▶ Outcome 成果と課題

□ → □

■ 成果

中学三年間の化学の学びと農業実習を経て、生徒たちはそれぞれに、地球環境を守るためには植物=森林を守る必要があることに気づき、自然保護につながるメッセージ性を持つ詩作をおこなった。

■ 課題

植物の科学的理解によって、地球環境保全への高い意識を持たせることができた。今後考えられる発展型としては、現代社会の分野へと話題を広げ、現在、どのような地域で森林が減少しているか調べ、原因や問題と向き合い、森林減少を止めるための解決策を考える学習につなげることである。

▶ Transformation 実践による変化

化学という小さな現象から出発して地球規模の事象に至る結びつきを生徒たちは実感として身につけることができています。今回応募する事例は、教育活動のすべてをESDと捉える私たちの教育実践の一端をクローズアップして紹介したもので、この取り組み単独でのESD実践による変化というより、これまで積み上げてきた実績すべての上に実を結んだものと考えています。

学校名：横浜シュタイナー学園 (よこはまゆたいなーがくえん)
代表名：加納 健 (かのうやすし / 代表理事)
生徒数：108名
住所：〒226-0016 神奈川県横浜市緑区霧が丘3-1-20
電話：045-922-3107
対象学年：7~9年生(中学1~3年生)
教科・領域：化学・農業実習と自然農講義
連携校・団体：
神奈川ユネスコスクールネットワーク
(窓口：横浜市立永田台小学校、神奈川県立有馬高校)
玉川大学 (ASPUnivNet 地域担当大学)
NPO 法人新治里山「わ」を広げる会
(横浜市・新治里山公園指定管理者)
田んぼクラブ NPO 法人カフェバーカリーふかふか
全国のシュタイナー校7校
その他



日々の教育実践の一コマとしてESDを行うのではなく、教育実践の隅々にESDが浸透していることが大切と考えている。どんな教科でもESDと成りうることを実証していきたい。ESDとは、子ども本来の成長を調和的に引き出すものであり、本来の教育のあり方である。



学年		1年生	2年生	3年生	4年生	
国語	韻文・詩	言葉遊び・詩(リズム感)		詩・慣用句(美しさ・内容)		
	聴く・話す	昔話・民話	動物寓話・聖人伝	旧約聖書の部分	神話・ことわざ・慣用句・語の由来	
	読む	手書きされたひらがな・カタカナのさまざまな文		聞き手を意識して音読する聖書物語	神話物語	
	書く	文字	フォルメン線描からひらがな・漢字へ	ひらがなの正しい表記/漢字、カタカナ	カタカナの正しい表記/漢字	ひらがな・カタカナの習熟/漢字混じり文
		作文	板書された簡単な文を書き写す	主語述語のある文を話し、書く短い描写文を書く	正確な写し書き・身近なことを簡単な文章にする	出来事を再現するように書く
	文法	聴く・話す・読む・書く指導の中に組み入れる				時制の一致 文の構成 接続語の性質 伝聞の表現Ⅰ
		名詞と動詞 助詞の用法	名詞と動詞、主語と述語の順序を考えて文を作る	明確な発音と表記文の組み立て 句点読点の用法	伝聞の表現Ⅱ 推量の表現	
	算数・数学	数える・数字の導入・四則計算・位取り	九九・時間・素数・四則計算	筆算・長さ・お金・魔方陣・九九	分数・分数の四則計算・結び模様のフォルメン線	
	理科	生活科	身近な自然に触れさせ、周囲の世界への関わり方の基本姿勢を作る・3年生では畑仕事・家作り・その他のいろいろな仕事を体験する		人間との関係での動物学	
	社会				郷土学	
フォルメン線描	直線と曲線・渦巻き	対称(上下/左右/四面)	非対称の形	結び目模様		
美術	1色・2~3色の響きの体験	中間色・混色の体験色の物語から	書道		美術史・木版画	
			色の物語			
工芸						
園芸						
音楽	五度の雰囲気のある歌を歌う、聴く・笛		ダイアトニックへの移行/楽譜の導入	三度(長三度・短三度)の雰囲気を楽しむ		
体育	運動遊び・縄跳び等	1年の継続・鬼遊び	2年の継続・障害物競争	3年の継続・ボール遊び		
オイリュトミー	ことばの基本・メルヘン ペンタトニック	聖人伝説 長調への導入	長調と短調 天地創造の詩	音符・分数 四角形と詩		
手仕事	羊毛体験・指編み・棒針編み	棒針編み・かぎ針編み(ネット・なべつかみ)	かぎ針編み(帽子)	クロスステッチ その他の刺繍		
外国語	簡単な日常会話・歌や詩・挨拶 ゲーム・お話を聞く・劇の遊び			文を書き		

5年生		6年生	7年生	8年生	9年生
詩・俳句・短歌・長歌		古典・能・狂言・歌舞伎・詩		現代詩・古典	
ギリシア・ローマの神話	15Cまでの歴史・人物の物語・万葉集	世界各国の風物詩・落語・狂言	20C初頭までの歴史・人物伝・歌舞伎	近・現代の歴史・人物伝	
ギリシア・ローマの神話	文学作品・民俗学に関わる文章	歴史物語・伝記・世界の風物詩	歴史物語・伝記・戯曲	悲劇・喜劇・歴史物語・文学作品・美学論・古典文学	
漢字・語彙を広げながら適切な文字を選んで書く	小学校までに習得すべき漢字を全て習得	中学校までに習得すべき漢字を全て習得			
紙文	実用的な文章・論文				
見たこと・聞いたことを詳しく描写する	授業から分かったことを自分の言葉でまとめる	読み手を意識して分かりやすく書く	感動したことや伝えたいことを明確に書く	課題・用途に適した目的の明瞭な長文を書く	
敬語の基本 語句や文の係り方 伝聞の表現Ⅱ 推量の表現	敬語に慣れる 助詞や助動詞の役割 重文・複文の構成	語の活用型 品詞の違い 文章の組み立て	段落と役割と相互の関係 単語の類別	敬語を使いこなす 助詞・助動詞 文章全体の構成	
フリーハンド幾何・小数・尺描	百分率・ピタゴラスの定理	代数・正の数と負の数・方程式	根計算・三角形の合同・黄金比・一次方程式・一次関数	順列と組合せ・確率 二次方程式・二次関数 円錐曲線	
動物学・植物学	動物学・植物学・鉱物学・物理学(音・光・熱・磁気・電気・力学)化学(燃焼)	人間学(栄養・健康)・物理学(音・光・熱・磁気・電気・力学)化学(燃焼)	人間学(構造)・物理学(光・水力・電気)・化学(人体と栄養)	生物学(生理学・解剖学) 物理学(熱・音・情報工学) 化学(空気・有機) 気象学・地学	
日本史 世界史	古代	中世	近世	近現代	
地理	日本と近隣諸国	世界の風土・産業・気象・地質・天文	民族性・文化・経済・宗教	7年生の内容の発展	世界と日本(経済・人口・環境などを社会的に)
5年生から幾何学に移行する					
白黒デッサン・層技法					
ボックス授業や物語のテーマを色彩で表す			自然の観察から風景を描く		美術史・木版画
やわらかい素材の木彫(簡単な道具)	木工台に固定した木彫(美しい道具)	木を素材とした器の制作	自由制作(素材・工程)	彫像(堅めの木・粘土・石など)・鍛金	
		土作り・自分の木の観察	自分の木の観察・リース、ポプリ作り	食品加工・花壇の運営	農業実習
カノンから二重唱	短調の曲も練習	フーガ・オクターブ 三重唱・四重唱のアカペラ、もしくは楽器をつけて		カデンツ (ソナタを通して)	
ボールゲーム・馬跳び等	ボールゲーム・棒・器械体操	ボールゲーム・陸上競技	ボールゲーム・7年の継続	各自で目標を設定	
五星形音階	棒と秩序音程・オクターブ	感情の動き・ダイナミックなフォーム	心の動きの強い詩 ユーモア・バラード	大きな作品に取り組む	
動物縫いぐるみ	人形・手袋	シャツ(手縫い) 室内履き	素材学・ミシン 衣服(ミシン縫)・靴下	洋裁・かご編み	
き、読む	文法法則の導入 読本	短い作文 (手紙文など)	外国の歴史や文化について学ぶ	これまでの内容の総復習と定着	

神奈川県地域には地域のユネスコスクールが連携する神奈川県ユネスコスクール連絡協議会があります。本学園もこの協議会に参加し、地域ベースでESDの質向上を目指す取り組みを続けてきました。2018年、ここで培われた地域連携の成果を宣言文にすることを提案し、同年12月8日に玉川大学で開催された第4回ユネスコスクール神奈川県大会で以下の宣言が採択されました。地域を越えて共有したいユネスコスクールの「こころ」として大切にしたいと思います。

ユネスコスクール神奈川宣言

- ユネスコスクールの使命は、豊かな教育文化を通じて人々に地球市民としての意識を育て、持続可能な社会をつくることです。
- ユネスコスクールのネットワークは、個性豊かな文化と文化が出会い、相互に影響し合いながら、より豊かな教育文化を築いていくためのプラットフォームであることをここに確認します。
- 豊かな教育文化は、子ども中心に築かれるのでなければなりません。
- すべての子どもたちの心身の特性を含む個性、民族的・文化的・言語的な背景の多様性に応じて、その子どもたちにふさわしい教育文化を生み、育てられるよう、校種や機関を越えた連携を築いていくことが必要です。
- 豊かな教育文化が生まれ育つためには、教職員とそのサポーターの教育活動が自主性、自律性に委ねられていることが重要です。
- 教育活動の自主性の保障と、それに裏付けられた多様性への指向、そしてお互いの活動に敬意をもってつながっていく姿勢こそが、ユネスコスクール活動のもっとも重要な持続可能性の要件です。そのように足下から考え、実践していくことで、私たちはSDGsを目標達成に向けて力強く推進していきます。

2018年（平成30年）12月15日

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会加盟校一同

神奈川県ユネスコスクール連絡協議会メンバー：

ASPnet 神奈川県立有馬高等学校、横浜市立市ヶ尾中学校、横浜国立大学付属鎌倉小学校／中学校、横浜市立幸ヶ谷小学校、湘南学園中学校高等学校、横浜市立永田台小学校、横浜市立東高等学校、横浜シュタイナー学園
ASPUivNet 玉川大学教育学部、東海大学教養学部



<http://www.unesco-school.mext.go.jp/jov8gx488-3147/#declaration>

ユネスコスクール公式サイト 横浜シュタイナー学園のページ

横浜シュタイナー学園のユネスコスクール活動報告が掲載された資料へのリンクを集約してあります。ぜひご訪問ください。



『キラリ発進！サステイナブルスクール』Vol.1, Vol.2

『第2回ユネスコスクール神奈川県大会報告書』

『2014年ユネスコスクール世界大会記念 ESD 優良実践事例集』

『ユネスコスクールの今 - 広がりつながる ESD 推進拠点』

<http://www.unesco-school.mext.go.jp/?key=mu22vqhg2-18#documents>

『学びを選ぶ 学びをつくる ルポ シュタイナー学校の一年』

元文部科学省付記者が1年間かけて取材した本学園のルポルタージュ。保護者の教育選択、エポック授業、フォルメン線描、教科書のない授業、9年間担任持ち上がり、家づくり、音楽専科、学校自治、etc.



田幡秀之著、時事通信社刊

A5版 137ページ 860円（税込、送料別）

*横浜シュタイナー学園にご注文ください。

<https://yokohama-steiner.jp/books/#rupo>

『続ルポ シュタイナー学校の1年～自由への曳航～』

ルポルタージュの続編。本報告書第三部未収録分の卒業生レポート、アクティブラーニング、道徳教育、演劇教育、農業実習、ITC教育、グローバルシチズンシップ教育、卒業プロジェクト、etc.



田幡秀之著、NPO法人横浜シュタイナー学園刊

A5版 172ページ 1,080円（税込、送料別）

*横浜シュタイナー学園にご注文ください。

https://yokohama-steiner.jp/books/#zoku_rupo

『持続可能な教育社会をつくる - 環境・開発・スピリチュアリティ -』

永田佳之先生による暗示型ESDの論考「^{サステイナブル}持続可能な教育実践とは - ホールスクール・アプローチを超えて」が収録されています。他にも、国連・ESDの10年の始まりにESDの未来を展望した秀逸な論考がたくさん収録されています。



せせらぎ出版刊

1,714円+税（送料別）

<http://www.seseragi-s.com/shopping/?pid=1175075186-969773>

ESD に想う — 出会いと学び

学園ユネスコスクールグループ・メンバー
心理学教授、臨床心理士
福田憲明

サステナブルスクールである横浜シュタイナー学園の実践をまとめたこの冊子の作成に携わるなかで、また収録されている座談会に参加して、改めてユネスコスクール、ESDそしてサステナブルスクールとは何かについて考え、また暗示的ESDという考え方を確認することができ、私自身の理解を深めることができました。

私は、人々の心の健康問題に取り組む臨床心理学者として、これまで学校生活に苦しむ子どもたちの心のケアと学校からの相談に応じてきました。その中で、ビオトープやグリーンカーテンの活動に力を入れているいくつかの学校に出会いました。訊けば、ユネスコスクールとしてESDに取り組んでいるといいます。そこからESDに関心を持つようになりました。今から5、6年前のことです。以来、サステナブルとは何かを考えつつ、しかし明確な意味を掴みかねていました。

10数年前に無残に後退したスイスの氷河を目の当たりにしてから、地球環境と私たちの在り方の関係に、私自身強い問題意識を持っていました。環境問題を考えることがESDにつながると思いましたが、それだけではないという思いがありました。

ESDが私の課題となったのは、私たちが直面しているこの環境の中で、生きていく力をどうやって身につけられるかを考え、我が子の教育を託す場として横浜シュタイナー学園を選択したときからです。そこで、学園がユネスコスクールであることを知り、とても魅力を感じました。一体どのような学びが展開しているのだろうと思って参加した入学説明会や学校見学、体験授業を通して、これまで理解していたESDとは異なった質の学びがあることを体験的に知りました。

学園の学びは、私たちが生きている環境をトータルに理解しようとしています。環境と私たち自身との相互関係や交流の意味を探求しています。人としての存在の意味、人生のあり方を把握しようとするその道筋と方法を学び取るための基礎となる力、いわば生きる智慧を身につける学びなのだと感じました。

持続可能な、ということを考えると、シュタイナー教育は100年の歴史を持ちます。まさに持続してきています。人が育っていく上での本質的な学びがそこにあるからでしょう。サステナブルの意味が腑に落ちました。

私の専門の心理学では、デベロップメントを発達と訳します。社会の「持続可能な開発」とともに、人の「永続的な発達を支える」学び、人が生涯発達していく可能性を信頼し、その過程に寄り添い促していくことこそがESDではないかと、私は考えています。

この冊子に表現されている学びの実際や卒業生の姿、また学びの促進者としての先生方の言葉から、ぜひ学びの場にいる子どもたちの体験を想像してほしいと思います。読んで読者の皆様の中に生まれる感覚を感じてほしいと思います。学びの深みを感じられるのではないのでしょうか。きっと、学園の学びに実際に触れたくなると思います。サステナブルスクールの意義は、この学びの奥深さを広く伝えることなのではと、私は考えています。

おわりに

学園ユネスコスクールグループ・メンバー
横浜シュタイナー学園事務局長
佐藤雅史

2016年のサステナブルスクール事業申請の際、その申請書に次のように書きました。

(横浜シュタイナー学園の)ESD実践を継続しつつ、この教育のESD性を客観的な言葉に置き換えて社会と共有していくことが大切だと考えます。今回の事業では、上記の活動実践を整理し共有可能な材料として言語化していくことを取り組みの中心に据えたいと考えています。

サステナブルスクールとしての3年間は、この言葉の通り、全国24校のサステナブルスクールとの交流を通じて、本学園のESDの「本質が伝わる言葉」を探す旅でした。その間の校種を越えた先生方との出会いは、新しい学びの連続でした。また、事業推進委員の先生方が提供して下さるアドバイスからもよい刺激をたくさんいただきました。

なかでも成田喜一郎先生が示して下さったオートエスノグラフィーの手法は、「本質が伝わる言葉」の重要な手がかりになると思いました。その思いから出発して試行錯誤の末にたどり着いたのが、物語によって本質を特徴づける手法です。それを冊子の企画会議で提案したところ、横山先生や福田さんの思いとも重なって、企画が前進することになりました。このきっかけを与えて下さった出会いに感謝するとともに、この手法がどこまでの的を射たものになっているのか、皆様の声に真摯に耳を傾けたいと思います。

ESDでは子どもの主体性が鍵となりますが、この冊子の第一部では、9才くらいまでの子どもたちの本質にふさわしい主体性とは何であるかを問い、立ち止まって考えるための材料を提供できたのではないかと思います。あわせて、シュタイナー／ヴァルドルフ教育で「愛される権威」と言われる教育者のあり方や、そのような教育者と子どもたちとの関係をどのようにしたら築けるのかについても、大枠は描写できたように思います。

本冊子の制作にあたっては、ユネスコスクールグループのメンバーをはじめ、素敵なイラストを描いてくれた6年生担任の太田初先生、デザインや写真の管理を引き受けて下さった広報の会の皆さん、座談会の活字起こしを手伝って下さった林恵子さんほか、たくさんの方の力をお借りしました。詩の掲載を了解してくれた在学学生、卒業生の皆さん、貴重なスピーチ原稿や写真を提供してくれた卒業生の皆さん、また、田幡秀之記者からは、著書『自由への曳航』の卒業生取材記事の転載をご快諾いただきました。この場を借りて、すべての皆さんに感謝をお伝えしたいと思います。

最後になりますが、この3年間、サステナブルスクール事業を全力で支えて下さったユネスコ・アジア文化センターの皆様、とくに教育協力部の藤本早恵子さん、篠田真穂さんに心より御礼を申し上げます。ここで育まれたサステナブルスクール事業の成果を、さらにサステナブルな力へと変容させていくために、これからもご一緒させてください。

横浜シュタイナー学園
サステナブルスクール報告書

2016年9月～2019年1月

こんなにいっぱい
日常に生かし 育む ESD

発行日 2019年1月31日
発行 特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園
〒226-0016 神奈川県横浜市緑区霧が丘 3-1-20
tel./fax. 045-922-3107
<https://yokohama-steiner.jp/>
企画 横浜シュタイナー学園 ユネスコスクール・グループ
編集・文 佐藤雅史
監修 横山義宏 / 福田憲明
デザイン 横浜シュタイナー学園 広報の会
文中イラスト 太田初

© 特定非営利活動法人 横浜シュタイナー学園 2019

本冊子は以下の事業委託助成を受けて制作しました。

平成30年度 ユネスコ活動費補助金
グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業
「ESD の深化による地域の SDGs 推進事業」
(文部科学省 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター)

